

# 神楽遺跡発掘調査報告書

1981

神戸市教育委員会

## 序

神戸市は、南に瀬戸内海、北には六甲山系を擁する恵まれた自然環境をもとに、「緑と、心のふれあいと、生きがいのまち」の樹立をめざしています。しかし、この都市づくりのなかで、開発の進展に伴い、埋蔵文化財の保護に関して多くの問題も生じています。

これまで、早くから市街地化された地域では、ほとんど遺跡が知られていませんでしたが、近年、市街地の再開発により、新たな遺跡が発見されるようになりました。この神楽遺跡も、神戸市営高速鉄道（地下鉄）の建設に伴い発見された遺跡のひとつです。

神楽遺跡の調査により、弥生時代から平安時代にわたる貴重な資料を得ることができました。遺跡は、記録保存されることになり、再び姿を現わすことはありませんが、この記録が、地域の歴史を明らかにするうえで、多少なりともお役に立てば幸いです。

調査および本書の刊行に際し、関係諸方面の多大なる御協力を得ることができました。これも、関係者各位の御理解によるものであり、深く敬意を表します。本書が、市民の方々、ならびに歴史を学ばれる方々に御活用いただけることを願いますとともに、埋蔵文化財について、なお一層の御理解と御協力を賜わりますようお願い申し上げます。

昭和56年3月

神戸市教育長

安 好 匠

## 例　　言

1. 本書は、神戸市長田区神楽町に所在する「神楽遺跡」の発掘調査報告である。
2. この調査は、神戸市教育委員会が昭和54年11月28日から昭和55年1月31日にかけて実施したものである。
3. 発掘調査および本書の作成は、文化課学芸員の菅本宏明が担当した。
4. 出土遺物の整理に際し、鬼頭清明氏（奈良国立文化財研究所）、吉田恵二氏（奈良国立文化財研究所・現国学院大学）、寺島孝一氏、横山茂氏（平安博物館）、吉田昇氏（兵庫県教育委員会）、岡本一士氏（加古川市教育委員会）より御教示を賜わった。ここに厚く謝意を表する次第である。
5. 調査・整理作業には、石田淳子、大森敦子、古屋野桂子、濱口宏美、福井真山美、松岡規子、松原千枝が参加した。
6. 本書に使用した方位は真北を示し、レベルは海拔標高である。遺物写真的縮尺は、約1/2.5に統一し、例外については特に註記した。

# 目 次

I . はじめに .....	1
II . 遺跡の立地と環境	
1 . 遺跡の立地 .....	2
2 . 周辺の歴史的環境 .....	2
III . 発掘調査の概要	
1 . 調査に至る経過 .....	6
2 . 調査の概要 .....	7
IV . 遺構	
1 . 遺跡の概観 .....	9
2 . 遺構 .....	10
V . 遺物	
1 . SD01出土の遺物 .....	14
2 . SD02出土の遺物 .....	15
3 . ピット出土の遺物 .....	34
4 . 包含層出土の遺物 .....	35
VI . まとめ	
1 . SD02出土の土器について .....	39
2 . 遺跡について .....	43
3 . 結びにかえて .....	44

## 写真図版

- |                    |                        |
|--------------------|------------------------|
| 図版 1. I 区 全景       | 図版11. S D02出土土師器       |
| 図版 2. II 区 全景      | 図版12. S D02出土土師器       |
| S D01断面            | 図版13. S D02出土土師器       |
| 図版 3. S D02断面      | 図版14. S D02出土土師器       |
| 図版 4. I 区 包含層出土須恵器 | 図版15. S D02出土綠釉陶器・灰釉陶器 |
| 図版 5. I 区 包含層出土土師器 | 図版16. S D02出土綠釉陶器      |
| 包含層出土土錘            | 図版17. S D02出土灰釉陶器      |
| 包含層出土石製紡錘車         | 図版18. S D出土黒色土器        |
| 図版 6. II 区 包含層出土土器 | S D02出土土錘              |
| 図版 7. S D01出土弥生土器  | 図版19. S D02出土土器        |
| 図版 8. S D02出土須恵器   | ピット内出土製塙土器             |
| 図版 9. S D02出土須恵器   | 図版20. ピット内出土製塙土器       |
| 図版10. S D02出土須恵器   | 図版21. S D02出土墨書き土器     |

## 挿 図

	頁		頁
図 1. 周辺遺跡分布図	5	図14. S D02出土土器	21
図 2. 調査地位置図	6	図15. S D02出土土師器	22
図 3. 調査地周辺航空写真	7	図16. S D02出土土師器	23
図 4. 調査区割配置図	8	図17. 土師器皿・坏・塊の法量 による分布図	24
図 5. I 区西壁断面土層図	9	図18. S D02出土黒色土器	27
図 6. S D01断面土層図	11	図19. S D02出土灰釉陶器・綠釉陶器	29
図 7. S D02断面土層図	11	図20. 墨書き土器「東福」	32
図 8. I 区遺構図	12	図21. S D02出土土錘	33
図 9. II 区遺構図	13	図22. ピット状遺構出土製塙土器	34
図10. S D01出土弥生土器	15	図23. I 区包含層出土土器	35
図11. 須恵器坏の法量による 分布図	17	図24. 包含層出土石製紡錘車	36
図12. S D出土須恵器	19	図25. II 区包含層出土土器	36
図13. S D02出土須恵器	20	図26. 包含層出土土錘	37

## I はじめに

近年、大都市にみられる周辺部のニュータウン建設と居住人口の増加、そしてそれに伴う人口のドーナツ化現象は、神戸市においても例外ではない。このような動向に伴い、周辺部と都市部を結び、既成市街地においては、より整備、拡充された交通大系の一環として「神戸市民の新しい足」となる市営高速鉄道が建設されることになった。神戸市営高速鉄道（地下鉄）山手線は、新長田と布引の間に建設されるもので、すでに開通、営業している西神線（名谷一新長田）と結び、既成市街地中心部をその路線としている。

これまで既成市街地においては、過去にいくつかの遺跡が知られている程度で、それも市街化されるにしたがって、すでに姿を消してしまったものが少なくない。はやくから市街地としてひらけている地下鉄路線建設地内では、その位置や実態の明らかでない福原京のほかは、全く遺跡の存在は知られておらず、また今日まで確認するすべもなかった。山手線の建設は、全地区地下方式で大部分オープンカット工法をとるため、埋蔵文化財が存在すれば、その破壊が生じることは必至であった。そのため、山手線の建設事業にともない、埋蔵文化財の調査は昭和52年12月より立会および試掘調査を実施、続行している。この結果、これまでに楠・荒田町遺跡を確認し、<sup>(註)</sup>発掘調査を行ない、市街地に埋もれている遺跡についてようやくその一端が明らかにされつつある。

**神楽遺跡の発見** 今回の神楽遺跡は、山手線建設工事第11工区で、本格的な工事に先立つ地下埋設物の確認時の立会、および埋蔵文化財についての確認試掘調査を実施したところ、一部区間で古墳時代から平安時代にかけての遺物包含層が確認され、その直下に遺構の存在することが明らかになった。地下鉄建設の場合、すでに市街化の進んだところであり、建設工事の着工によって埋蔵文化財の確認調査が行なえるという、いわば同時進行に近い状況でしか対応できないため、埋蔵文化財は、現状においては保存をはかることが極めて困難である。神楽遺跡について、遺跡が確認された時点で神戸市教育委員会と神戸市交通局との間で協議を行なった結果、発掘調査を実施し、記録作成することになった。

(註) 楠・荒田町遺跡発掘調査報告書 神戸市教育委員会 1980

## II 遺跡の立地と環境

### 1. 遺跡の立地

神楽遺跡は、神戸市長田区神楽町に所在し、六甲山系とそれより派生する山塊に囲まれ、南は大阪湾に面する西摂平野の西辺近くに位置している。この付近は、わずか南北2km余りの平野部に、国鉄、私鉄、高速道路が走り、工場や商店、住宅が建ちならぶ市街地である。かっては、遺跡地の北0.4kmのところに西国街道があり、それを5km余り西進すると、鉢伏山(標高253m)が海岸線までせまる平野部の西限にあたる。歌に詠まれた「須磨の闇」、あるいは「一の谷合戦」で知られるところであり、旧国の大津、播磨の国境ともなっている地域である。

調査地の付近は、大正期に入り急速に市街地と化し、旧地形をとどめている所は少ないが、北西から南東方向へ緩く傾斜する地形にある。旧湊川、苅藻川(新湊川)、妙法寺川などの中小河川によって形成された緩扁状地性低地に位置し、調査地現地表面は、標高5.6mである。

### 2. 周辺の歴史的環境

今日知られている遺跡の多くは、大正期から昭和の初期にかけて発見あるいは報告されているものである。ここ数年の再開発などに伴う調査が行なわれるまで、新たな遺跡が書き加えられることのなかった地域である。

**旧石器・縄文時代** 旧石器・縄文時代の遺跡は、頗著な発見はなく、現在知られているものも採集資料に限られている。旧石器時代の遺物は、会下山において丘陵上からナイフ型石器が発見されている。縄文時代の遺跡としては、早期の押型土器が採集された境川遺跡と中期の土器片が報告されている名倉遺跡があり、最近の調査によって発見された五番町遺跡で、晩期の土器と上塙が確認されているにすぎない。

**弥生時代** 弥生時代になると、狭小な平野部しかもたない当地域では、山裾に発達する中位洪積段丘や沖積地の微高地に遺跡が点在するようである。

前期の遺跡として、楠・荒田町遺跡があげられる。地下鉄建設工事に伴い発見され、從来、遺跡の存在が希薄であった市街地に調査の日が向けられる契機となった。標高10~16mの中位洪積段丘上に存在し、発掘調査の

結果、前期に属する住居址、貯蔵穴などが検出された。

中期は、東山、河原、熊野などが知られる。これらの遺跡は、小林行雄氏の紹介、研究に依るところが大きい。東山遺跡は、当地方の第Ⅲ様式の基本資料とされている。また河原遺跡は、第Ⅲ～Ⅳ様式の壺形土器とその中に納められていた40個近い貝輪が出土したことで知られている。

後期の遺跡は、遺物出土地として長田神社境内遺跡、長田神社南遺跡<sup>9)</sup>が知られるにすぎない。

このように、当地域ではまだ遺跡の内容やその分布が明確ではないが、楠・荒田町遺跡のように、今後、市街地の再開発に伴う調査によって資料の増加、研究の進展が期待されよう。

#### 古墳時代

弥生時代の遺跡があまり知られていないにかかわらず、前代からの発展を継承したと考えられる古墳の形成が見られる。夢野丸山古墳<sup>11)</sup>、会下山二本松古墳<sup>12)</sup>、得能山古墳<sup>13)</sup>などが、湊川から妙法寺川流域間の丘陵頂部を占地して築かれている。この3古墳は、いずれも堅穴式石室から鏡をはじめとする豊富な副葬品を出している。中期には、菟藻川河口近くの右岸に全長約180mの前方後円墳と推定される念佛山古墳<sup>14)</sup>の出現を見る。鱗付円筒埴輪の出土が知られるが、既に消滅しており詳細を知ることができない。後期古墳は、菟藻川流域に点在していたようであるが、今日ではその姿は失われ、群集墳の形成についての詳細は不明である。

#### 奈良時代以降

当地域は、奈良時代には攝津国雄伴郡に属し、のちに平安時代に入り八部郡と改められている。本遺跡付近は、『和名類聚抄』にみえる八部郡長田郷に属していたと考えられる。奈良時代以降の周辺遺跡は、極めて少なく、奈良・平安時代の室内遺跡や、会下山二本松古墳の墳丘から検出された平安時代の経塚が知られているにすぎない。

室内遺跡（房王寺遺跡）は、奈良～平安時代の瓦類が出土したことで知られる。この遺跡については、地名などから、八部郡衙の推定地とされ、同時に付属寺院（房王寺）を想定されているが、これまでに調査例が少なく、不明な点が多い。

古代山陽道については、今回調査地の北0.4kmに東西する「大道通」に比定されているが、これより西については、海岸沿いに須磨一の谷を通り、明石に至るとされるものと、本遺跡より西2km程にある妙法寺川に沿って北へ迂回したとの考えがある。『延喜式』にみえる須磨駅については、長田郷の西辺、現在の須磨付近に想定されているが、上記の問題ともかかわり位置は確定しえず、遺跡からも何ら手掛りは得られていない。

平安時代末期の12世紀後半には、八部郡は、大輪田泊や平清盛の福原山荘が営まれ、政治・経済的に重要な地域となるが、今日では市街地に埋もれ、これらに関する遺跡も、未だ明らかにされていない。

## 註

- 1) 『おおむかしの神戸』 神戸市立考古館（第8回特別展） 1976
- 2) 註1に同じ
- 3) 直良信夫 「神戸市名倉町出土の櫛文土器片」『近畿古文化叢考』 1943
- 4) 丸山潔也 『楠・荒田町遺跡発掘調査報告書』 神戸市教育委員会 1980
- 5) 註4に同じ
- 6) 小林行雄 「神戸市東山遺跡弥生式土器研究」『考古学』第4巻第4号 1933
- 7) 浜田耕作 「貝輪を容れた素焼壺」『人類学雑誌』第36巻第8号 1921, 小林行雄 「神戸市東山遺跡弥生式土器研究」（前掲）
- 8) 註6に同じ
- 9) 太田謙郎 「神戸市の史前遺跡」『考古学』第3巻第2号, 『長田神社造営史』 長田神社
- 10) 註4に同じ
- 11) 梅原末治 「神戸市丸山古墳と発見の遺物」『考古学雑誌』第14巻5号 1923, 同「兵庫県下に於ける古式古墳の調査」『兵庫県史蹟名勝天然記念物調査報告書』第二輯 1924
- 12) 長馬悦藏也 「公下山二本松古墳及び經塚」『兵庫県史蹟名勝天然記念物調査報告書』第五輯 1928
- 13) 梅原末治 「神戸市板宿得能山古墳の調査」『歴史と地理』第14巻4号 1924, 同「神戸市板宿得能山」『兵庫県史蹟名勝天然記念物調査報告書』2 1925, 森本六則 「得能山古墳」『考古学雑誌』第14巻3号 1924
- 14) 太田謙郎 「有鉗埴輪円筒」『考古学』第2巻4号 1931, 喜谷美宣 「市街地に消えた大前方後円墳」（神戸の考古学21）『雪』第30巻9号 神戸市防火協会連絡協議会 1978
- 15) 福原潜次郎 「神戸市西尻池村発見の古墳に就きて」『考古界』第6編第1号 1906
- 16) 「房王寺故址」『西摂大觀』 1912, 高井伊三郎 「六甲山麓地帯の奈良時代遺跡」『伊丹市史』第1巻 1971, 神戸市教育委員会が昭和52年度に実施した、市立室内小学校内の発掘調査においても、平安時代の瓦類が出土した。
- 17) 註12に同じ
- 18) 落合重信 「長田区内の小字名について」『歴史と神戸』第17巻第4号 神戸史学会 1968
- 19) 足利健亮 「浜津国」『古代日本の交通路』I 1981
- 20) 直木孝次郎 「駅の制度」『兵庫県史』第1巻 1974
- 21) 註19, 註20に同じ
- 22) 木下良 「山陽道の駅路」『古代山陽道の検討』（古代を考える17）古代を考える会 1978



図1 周辺遺跡分布図 1 : 25,000

### III 発掘調査の概要

#### 1. 調査に至る経過

今回、発掘調査を行なった神楽遺跡の周辺は、神戸の地場産業であるゴム産業の中心地をなしており、大小の工場が建ちならぶ地域である。このため、はやくから市街化が進み、埋蔵文化財についてはこれまで空白の部分であった。今回、地下鉄建設が行なわれるに際して、市街地の遺跡に、ようやく調査の目が向けられるようになった。

昭和54年1月に、交通局より第11工区（長田区神楽町1丁目～6丁目）の建設工事に先だって埋蔵文化財の分布調査依頼が教育委員会にあった。

立会の実施 これをうけて、埋蔵文化財調査は、本格的な工事に先立って行なわれる地下埋設管等の試掘調査に立会を行ない、遺跡の有無やその分布を明らかにすることから始めた。しかし、立会においては、埋設管の確認のための試掘を中心であることなどから、現代の攪乱が多く、遺物の検出や遺構の確

試掘調査の実施 認が困難であった。このため交通局と協議を行なった結果、埋蔵文化財についてあらためて試掘、確認調査を実施することになった。試掘調査は、



図2 調査地位位置図 1:2,500

工区内 100 m ごとに 2 m × 2 m の試掘 sondage を設けて行なうことになり、計 6 か所で調査を実施した。その結果、神楽町 1 丁目から 2 丁目にかけて遺物を検出し、攪乱層からの出土もあるものの、一部では遺物包含層を確認し遺跡の存在が明らかとなった。さらに、遺跡の範囲、遺構の分布を確かめるため、この付近に 3 か所の試掘 sondage を設けて遺跡の状況を明確にすることにつとめ、東西約 50m の区間に遺構の存在を確認した。これにより、教育委員会と交通局の間で協議した結果、地下鉄工事の期間的、工法上の問題から保存が困難なため、発掘調査が必要であると判断し、昭和 54 年 11 月下旬から調査を開始し記録にとどめることになった。



図 3 調査地周辺航空写真

## 2. 調査の概要

長田区神楽町付近では、地下鉄建設路線内に、建物が存在していた所も少なくない。しかし、調査区域は、すでに建物が撤去された状態で、調査範囲外では地下鉄建設工事が開始されていた。調査地は、既設の埋設管等で攪乱の著しい道路部分を除き、2 か所に分けて設定した。発掘調査は、調査地西側を I 地区、東側を II 地区とし、計 323 m<sup>2</sup> にわたって行なった。調査地は、試掘調査の結果から、地表 1 m 前後まで全面に攪乱が著しいため、調査員立会のうえ、重機を使用して旧耕土下の床土部分まで掘削した。その後、人力による発掘調査は、昭和 54 年 11 月 28 日より開始し、翌年 1 月

## 発掘調査の概要

31日に終了した。

**地区割** 発掘調査に際し、調査地の位置を明らかにするため、地下鉄建設工事の測量図を利用し、地下鉄構築物のセンターラインと一致する地区割を設定した。将来、地下鉄完成後も、その位置を知ることができるようとした。センター ラインを中心に一区画3mの小地区を設定し、発掘された遺構や遺物の取り上げの地区名とした。

調査地は、明治期までは水田であった。その後、盛土、整地をして建物をつくったようで、地表下約1mまでは擾乱あるいは旧水田の床土層であった。その下に、古墳時代から平安時代の遺物を包含する厚さ約30cmの暗灰褐色土があり、その下が遺構面となる。しかし、建物の基礎が地表下1.5m以上の深さまでおよび、遺構面に達する部分もあった。特に、I地区では3分の1以上の面積が、建物基礎などの擾乱を受け調査不可能であった。また、II区では工場の廃油が遺構面にまでひろく浸みており、土が汚濁されていたために遺構の検出は困難をきたした。全体に、遺物包含層や遺構の保存状態は良くなかったが、溝状遺構などを検出し、多くの遺物の出土をみることができた。今回の調査で検出した遺構は、溝状遺構2条、土壙4基、ピット63か所などで、これらは弥生時代、古墳時代と平安時代に属するものである。

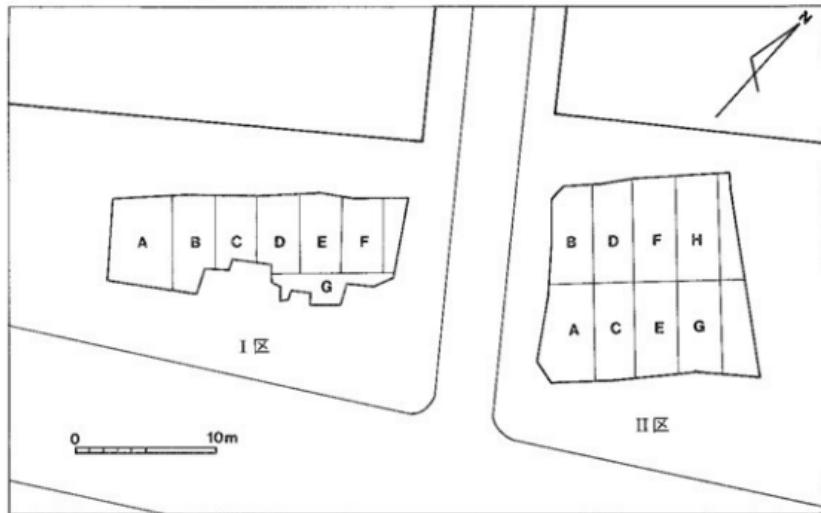


図4 調査区割配置図

## IV 遺構

### 1. 遺跡の概観

調査地は、地下鉄路線予定地内の東西46mの範囲で、I区とII区の調査地に分けた。遺構面の地形は、南東方向に緩く下がる傾斜であるため、遺構面の標高は4.0~4.5mとなっている。調査地の基本的な層位は、地表面層位から、1 現代の擾乱層、2 旧水田の耕土と思われる黒灰色粘質土層、3 旧水田の床土層(数層存在している)、4 遺物を包含する暗灰褐色砂質土層、5 淡褐色の砂質土層であり、この淡褐色土の上面において遺構が検出された。遺構面の上に堆積する遺物包含層は、水田開作時に削平されたためか、上面はほぼ水平な堆積をしており、厚さ20~50cmで遺構面に従って南に厚くなり、II区南側では数層に分けることができる。しかし、包含層出土の遺物は、古墳時代から平安時代にかけてのものが混在しており、包含層内の時期的分層はできない。遺構面となる淡褐色砂質土は、厚さ20cmほどの堆積で不安定な層であり、調査地東側に向かい黄褐色砂質土へと移行する。遺構は時代差があるが、この層から掘り込まれ同一面で検出された。II区において土層観察のため遺構面下の立割りを行なった結果、遺構面となる淡褐色~黄褐色砂質土下に灰色荒砂層が30cmつづき、その下で約10cmの厚さの暗灰褐色粘土と淡灰褐色砂層が堆積し、さらに下層も同様の砂層と粘土層が互層となって続いている。また、下層ほど東南に向かっての下降がつよくなり、荔藻川の旧河道へつづくと考えられる。遺構面下の各層には、遺物の包含はみられなかった。

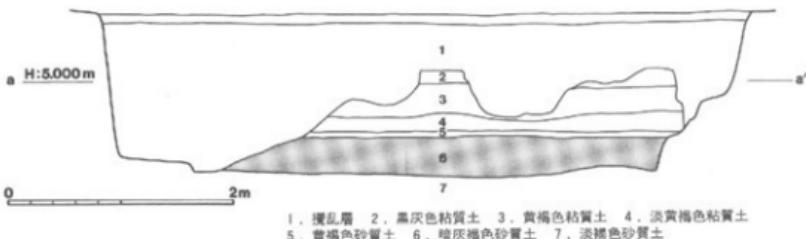


図5 I区西壁断面土層図

## 2. 遺 構

検出された遺構は、溝状遺構2条、土壙4基、ピット63ヶ所であった。検出遺構には、I区、II区を通して番号を付し、遺構の種類毎に、溝状遺構—SD、土壙—SK、ピット—Pで標記した。遺構図(図8、9)には、主要な遺構を表示した。なお、土壙とピットは、その形状から判別したが、必ずしも明確な区別ではない。

これらの遺構のうち、SDO1は弥生時代、SDO2は平安時代に属し、土壙、ピットは、弥生時代から平安時代に属するものである。

## 土 壙

SKO1 I区西端で検出された円形の土壙である。径0.8m、深さ0.28mで、壙底は、ほぼ平坦である。須恵器と土師器の細片が少量出土し、古墳時代後期と思われる。

SKO2 I-B区にある長径1.1m、短径0.7m、深さ0.35mの長楕円形の土壙。土師器片が少量出土。

SKO3 II区北東部にある深さ0.2mの浅い土壙である。ピットに3か所で切られているため明確な形はおさえられないが、径1.3mの不整円形を呈するようである。埋土より、古墳時代後期の土器片を多量に出土した。

SKO4 II区北東端で検出された不整形の土壙。幅1.3m、長さ2.0m以上、深さは0.26mである。古墳時代後期の土師器片を少量出土している。

## ピ ット

ピットは、I区で44か所、II区で19か所検出した。これらは、径0.5m以内で、深さ0.2mほどの浅い円形のものが多い。特にI区では、径0.3m以内のものが大半を占める。これらのうち、建物址等の柱穴と確認できるものではなく、性格については不明である。ピットからは、遺物の出土をみないものと、少量の土器細片しか出土しないものが半数を占め、これらについては時期が決め難い。時期が確認できるものは、弥生時代後期1か所(P-19)、古墳時代後期23か所、平安時代5か所(P-26, 36, 51, 52, 56)である。

P-19 I区中央部にある径0.2m、深さ0.15mの円形で、遺構底より弥生時代後期の蓋形土器口縁部が出土した。

P-38・41 P-38・41・42・44は、I区東半に互いに近接し、いずれも径0.5mほ

P-42・44 どの不整円形を呈する。深さは0.2~0.5mである。これらからは、古墳時代の製埴土器片が、廃棄されたと思われる状態で出土した。

### 溝状遺構

**S D 01** I区中央部で検出された南北方向にのびる溝状遺構である。擾乱に大きくかかり、長さ3.5mの部分しか確認できないが、幅2.5~3.0m、深さ0.7

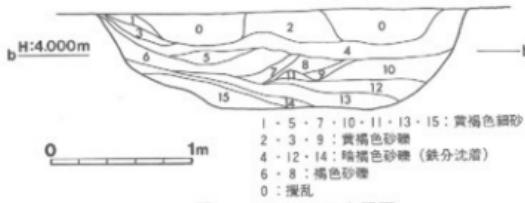


図6 S D 01断面土層図

mで南側へ若干下降している。遺構内の埋土は、細かい円礫層と砂層が互層となって堆積しており、この砂層部分に弥生土器が含まれていた。埋土の堆積状況から、自然流路と考えられる。

**S D 02** II区南半部にあり、部分的に現代の擾乱を受けていたが、幅4.5~5.0m、深さ0.4~0.7mで、東側へ緩く下降する東西にのびる溝状遺構である。南肩に幅2m、長さ4mの突出した不整形の段をもっている。溝底は約3mの幅で、横断面ではほぼ水平をなしている。埋土は、大きく二種に分層でき、上層に砂質土層、下層には粘土層が堆積していた。その堆積の状況は、ほぼ水平であり、穏やかな埋没状態を示している。埋土中より、平安時代を主とする土器が多量に出土した。遺物は埋土各層より出土し、層位別による遺物取上げを行なったが、同一個体が上層と下層から分かれて出土するなど、土質をまったく異なるにもかかわらず、層位による時期的差異は明確でなかった。

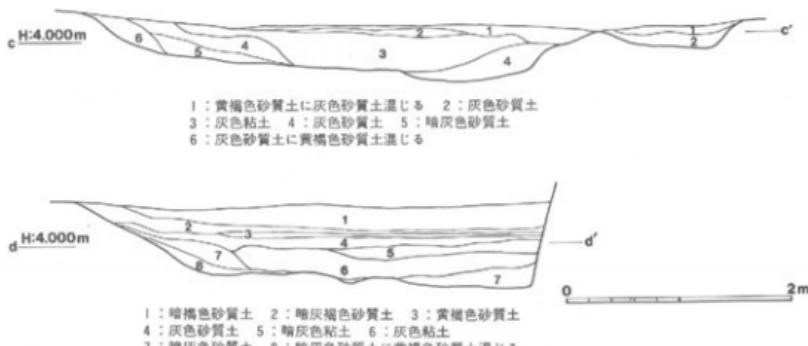


図7 S D 02 断面土層図

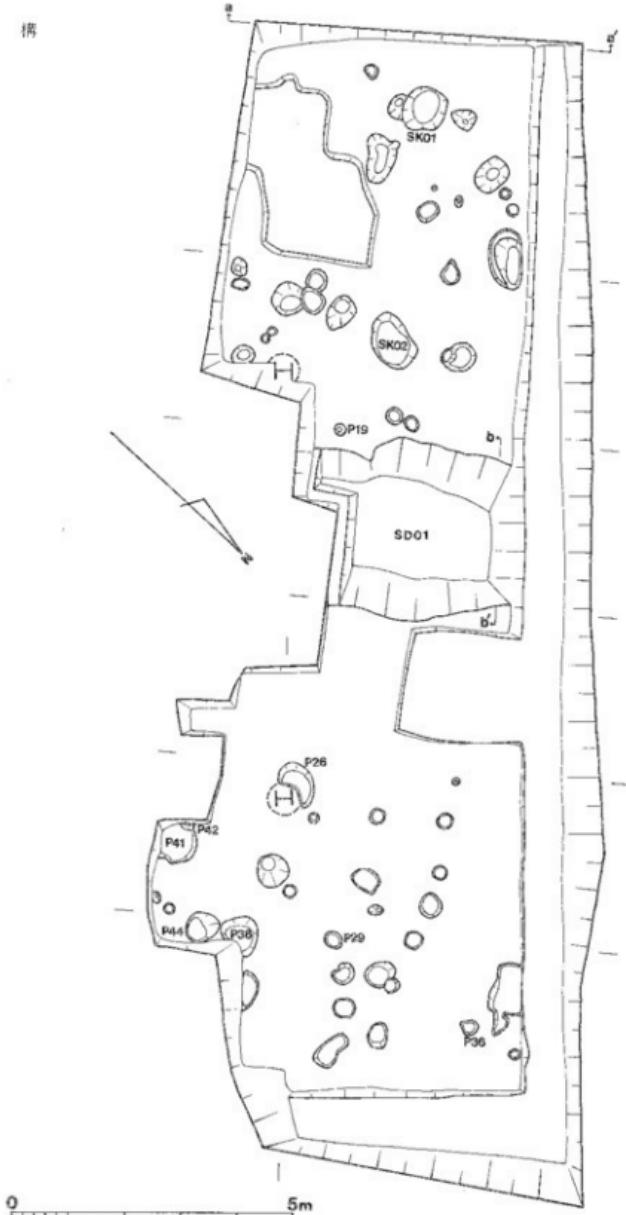


図8 I区 遺構図

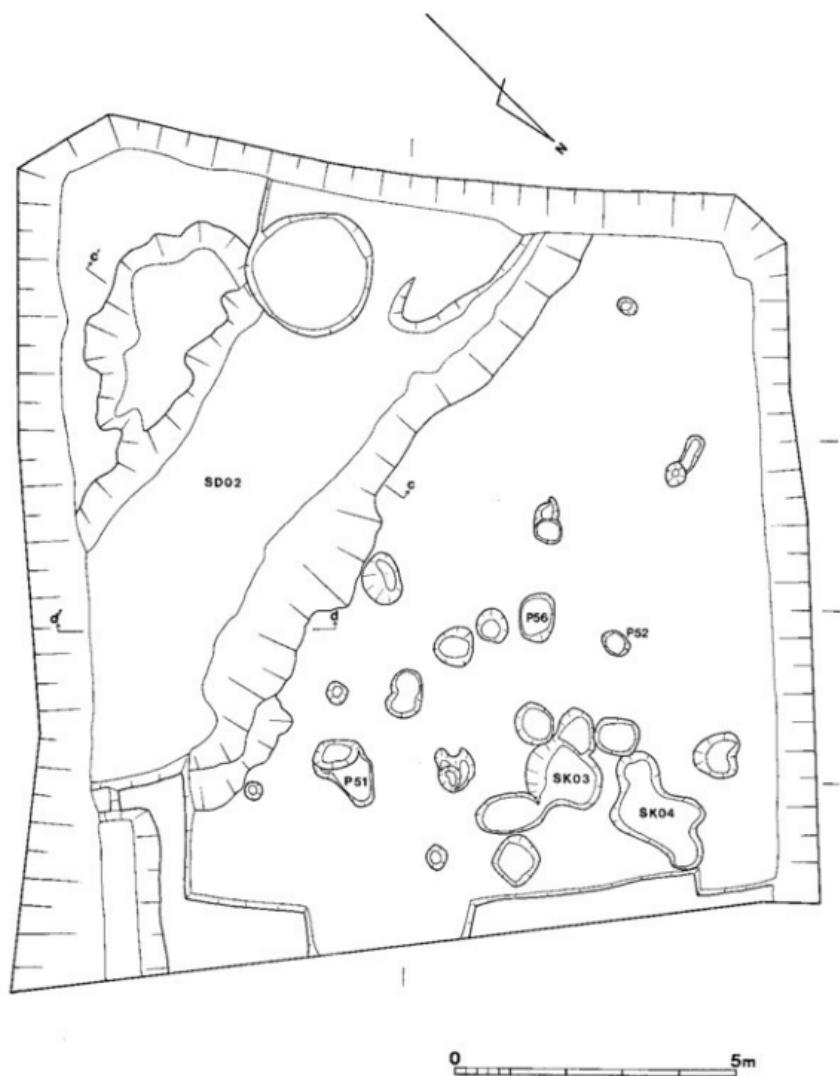


図9 II区 遺構図

## V 遺 物

今回の調査で出土した遺物には、土器・土製品・石製品などがあり、多量かつ多時期にわたっている。これらは、溝状遺構・土壙・ピットおよび遺構面直上の包含層から出土している。特に、溝状遺構 S D02からは、施釉陶器をはじめとする多量の遺物をみいだすことができた。

出土遺物のうち、量的に大部分を占めるのが土器類である。これらは、弥生時代から平安時代に至るもので、神樂遺跡の歴史的推移を示す資料である。以下、土器類を中心として、主要遺構ごとに、その出土遺物を説明する。

## 1. S D01出土の遺物 (図10-30~32, 180~183)

**弥生土器** S D01は、自然流路と考えられる溝状遺構で、弥生土器が出土した。出土土器は磨滅が著しく、また細片が多くを占めていた。

**甕形土器 (30)** は、体部外面を右上がり斜めの叩き（3条1cm）で成形し、内面は横撫でを施し、指頭圧痕が残る。口縁部は、内面に横方向、外面上に縦方向の刷毛目調整を行ない、端部は面をもっている。胎土中には、1mm大のチャート、雲母粒のほか、2~3mm大の花崗岩粒、赤色酸化土粒を多く含んでいる。31は、体部内外面に粘土離き目痕が明瞭に認められ、それを境にして、外面下半は平行もしくは左上がりの叩き、上半は右上がりの太い叩き（2条1cm）である。中位部は、縦方向の刷毛目調整が施され、叩き目が消されている。頸部内面には、指頭圧痕が残る。32は、外面右上がり斜め叩きで、縦方向の刷毛目調整を施している。底部は、突出した平底で外側面に指頭圧痕が残る。内面は、残存状態が悪いが、底部付近に簾状の刷毛目がみられる。

**鉢形土器 (180)** は、口径17.2cmで半球形状の体部をもつ。器面は残存状態が悪く、外面の調整は不明である。内面は、横方向の刷毛目調整。口縁端部は丸くおわり、全体につくりは粗雑である。胎土中には、1~2mm大の赤色酸化土粒を多く含んでいる。

**高環形土器** いずれも、脚部の破片で磨滅が著しく、器面の調整については不明である。32は、三方に円形透孔をもつ。181は、直線的に外傾し、裾部で外反する。

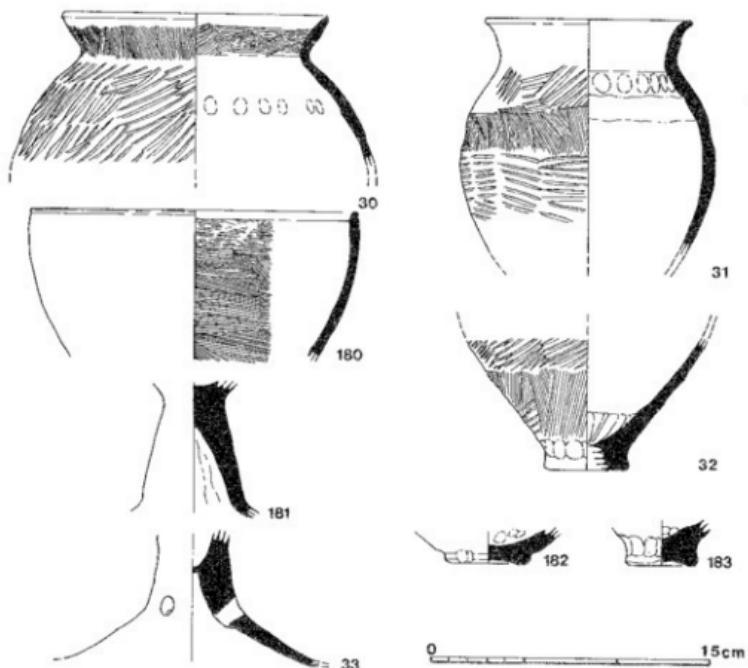


図10 SD01出土 弥生土器

これらの他に、図示できなかつたが、回線紋、横描紋を施すものが、細片で僅かに出土している。

SD01出土の土器は、IV様式からV様式にかけてのものであるが、量的に主体をなし、遺構の埋没の時期を示すものは、後期中葉から後葉に位置づけられるであろう。

## 2. SD02出土の遺物

溝状遺構SD02は、今回の調査でもっとも多種、多量の遺物を出土した遺構である。出土遺物は土器類に限られるが、調査地の遺構内出土の土器の約9%を占める量が出土した。須恵器、土師器、黒色土器、灰釉陶器、綠釉陶器があり、これらには、墨書きにより文字が記されたもの7点を含んでいる。また、他に少量ではあるが、土製品として、土錐が出土している。

S D02は、堆積状況から大きく上層、下層に分けられ、遺物の多くは下層より出土した。上・下層による区別をもって遺物の取り上げを行なったが、両層の遺物が接合する場合がみられ、また、古墳時代から平安時代の遺物が混在することなどから、堆積層序に対応しての土器の時期細分は困難であった。

出土した土器の大半は、平安時代のもので、古墳時代、奈良時代に属するものが僅かに含まれる。出土総数のもっとも多いのが土師器で、全体の約7割を占め、つづいて須恵器が2割を占める。残りの1割が黒色土器、綠釉陶器、灰釉陶器であるが、綠釉陶器34個体、灰釉陶器21個体で、合わせて1%あまりにすぎない。<sup>1)</sup>

#### a. 須恵器（図12-34～50、図13-51～66、図14-67～70）

須恵器には、壺・塊・壺・甕・鉢の器種がある。量的には、壺・塊類が圧倒的に多い。

##### i. 壺・塊

検出された壺・塊類は類別が容易でないものもあり、また、その類別が意味をもたないと思われるため、壺として一括した。49・50をのぞき、形態から3種に大別し、壺A、壺(塊)B、壺(塊)Cとした。<sup>2)</sup>

###### 壺A

壺A（51～58）は、平らな底部に口縁部が開いてたちあがるもので、法量から壺A I、壺A IIに区別する。

###### 壺A I a

壺A Iは、口径13.3～15.8cm、高さ3.2～4.3cmで、形態より3種に細分され、a（51・54）、b（53、55～57）、c（52）とする。壺A I aは、径高指數23前後で相対的に器高が低い。体部はやや内彎ぎみにたちあがり、口縁部は少し外反する。底部外面は、部分的に不整方向の撫でにより、ヘラ切痕が不鮮明になり、平坦に仕上げている。底部の外面をのぞき、内外面ともロクロ撫でを丁寧に施しており、底部と体部の境が稜をなし明瞭である。壺A I bは、直線的あるいはやや内彎する体部で、口縁部が少し外反する。底部外面は、ヘラ切り痕が認められ、粗い乱撫でを部分的に施しているものがあり、撫でが外周部に限られるもの（55）もある。内面および口縁部外面はロクロ撫でを施すが外面は撫での単位により凹凸がみられる。壺A I bは、径高指數から25のものと、27.5のものとに二分が可能で、また、形態的にも若干の差異が認められる。56・57は、体部がほぼ直線的に立ち上がり、口縁部は少し外反させている。53・55は、前者に比べ体部が内彎し、丸みをもった深い形態となっている。壺A I bのうち、前者は壺A I aに、後者は壺A I cに近い、中間的な形態をもっている。壺A I c

(52) は、内彎してたちあがる  
体部で口縁部をわずかに外反さ  
せている。底部外面は、ヘラ切  
り痕を残し、未調整である。こ  
のため、底部がやや丸みをもっ  
ている。a, b に比べ器壁が厚  
く、内外面に施されたロクロ撫  
でも、粗雑である。径高指数は  
29.3で、相対的にみて、深く、腰のまるい形態となっている。坏A I は、  
胎土から3種に大別でき、1：淡青灰色で、黒色の微粒を含むもの、2：  
青灰色のもの、3：濃青灰色で、黒色の微粒を含むもので、いずれも硬質  
である。この3種の胎土は、1・2・3が、a・b・cの3形態に対応して  
いる。

## 胎 土

## 坏 A II

## 坏 (坏) B

## 坏 B II a

## 坏 (坏) B I b

## 坏 (坏) B I c

## 坏 B II a

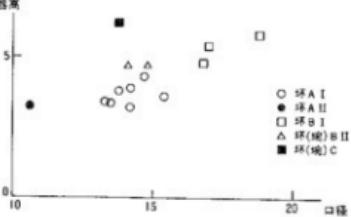


図11 須恵器坏の法量による分布図

坏 A II (58) は、口径10.6cm、底径6.8cm、高さ3.25cmで、器壁は厚さ5mm以上と厚い。底部外面をのぞき、全体にロクロ撫で調整で、口縁端部はまるくおさめている。焼成は良くなく、胎土も砂粒を多く含み粗い。

坏 (坏) B (34~37・39~48) は、高台の付くものである。口径により坏 B I (16.8~19.6cm) と坏 B II (14.1~14.8cm) にわけ、さらに形態により、a：平坦な底部から、直線的あるいはやや内彎して口縁部がたちあがる。b：内彎してたちあがり、壺形態に近いものとに細分される。坏 B I a (34・35) は、ヘラ切りの平坦な底部から直線的にたちあがる坏部で口縁部は一段の撫ででやや外反する。高台は低く、端部は丸みをもち外端部は、やや上がるるもので、坏底部端のやや内方に付く。内外面とも、ロクロ撫で調整を施すが、底部外面には、ヘラ切り痕が認められる。34は、焼き歪みが著しく、火拂がある。坏 (坏) B I b (43~47) は、貼り付けの高いハの字状にひらく高台を付し、口縁部は内彎してたちあがり端部を外反させるものである。また、下半部に、段状に稜をつくりだしているのが特徴である。内外面とも丁寧なロクロ撫でを施し、底部外面の中心部は、不整方向の乱撫でをしている。44の外面下半には、回転ヘラ削りがなされている。45には火拂が付く。坏 (坏) B I c (48) は、坏 (坏) B I b に類似した形態であるが、段状の棱が、凹線状になり上下の段がみられないこと、また、高台端部が丸くなることなど、坏 (坏) B I b の退化形態と考えられる。坏 B II a (37) は、やや内彎ぎみに上外方へたちあがり、口縁端部付近でわずかに外反させる坏部に、底部端に貼り付けの高台を付

- すものである。底部外面中心付近に、ヘラ切り痕をとどめるが、他は内外面ともロクロ撫で調整を施し、口縁端部は、つまみ上げられることなくまるくおさめる。口縁部のロクロ撫では、単位ごとに凹凸をなしている。坏（壇）B II b (36) は、法量のちがい、口縁部の段の有無をのぞけば、坏（壇）B I b の45と極めて似る。内外面とも丁寧なロクロ撫でを施し、底部外面にはヘラ切り痕が認められる。貼り付け高台の端部は、やや丸みをもっている。
- 坏（壇）C 38は、糸切り底の壺形態のもので、口縁部は内彎し、端部でわずかに外反させる。突出した底部には、糸切り痕が明瞭に残り、底部内面は、くぼんでいる。口縁部は、内外面ともロクロ撫でを施すが、撫による凹凸は顕著である。外面下半には、一条の回線をめぐらせてている。
- 坏（49） 49は、やや内彎ぎみの口縁部で、底部に貼り付けの高台が付くもので、奈良時代 8世紀代に属する。
- 坏（50） 50は、古墳時代のもので、SD02西端の溝底から出土した。6世紀前半 古墳時代 のものである。
- ii 壺
- 壺A 壺（59・61～65・67・69）は、各種あり、時期的差異もある。
- 壺B 壺A（59）は、二条の突帯を有する胴部の張るもので、体部の破片である。突帯は、いずれも貼り付けて、頸部下のものは断面が台形、肩部は付くものは、丸みをもつ三角形である。外面は、叩き成形後、撫でを施し、大部分は丁寧に調整されている。肩部突帯下に指頭圧痕がある。壺B（63）は、糸切り痕をとどめる底部の破片で、体部は丸みが失なわれている。
- 壺C 壺C（69）は、肩部が張り後をなす長頸壺の体部破片である。底部は平底で、やや外方に張る高台が付く。
- 60は、上半部を欠損するが、壺の底部と考えられる。円板状の底に、叩きによる成形の直線的に外傾する体部下半をもつ。
- iii 鉢
- 鉢A（68）は、口径30.5cm、高さ11.2cmで、体部は、内彎してたちあがり、口縁部を外反させている。底部は、断面台形の高台を貼り付ける。体部は、叩き成形で、外面中位に格子叩き目が認められ、口縁部、体部上半は、ロクロ撫でを施す。体部外而下半は、回転ヘラ削りを、内面下半は、不整方向の撫でによる調整である。図示できなかったが、同一個体かと思われる口縁部の片口部片があり、片口の形態となる可能性がある。鉢B（70）は、やや突出したヘラ切りの底部で、上位で肩の張るまるい体部と短く外反する口縁部からなる片口鉢である。底部はヘラ切り後未調整、他は内外面とも丁寧なロクロ撫でを施す。口径15.1cm、高さ11.4cm。

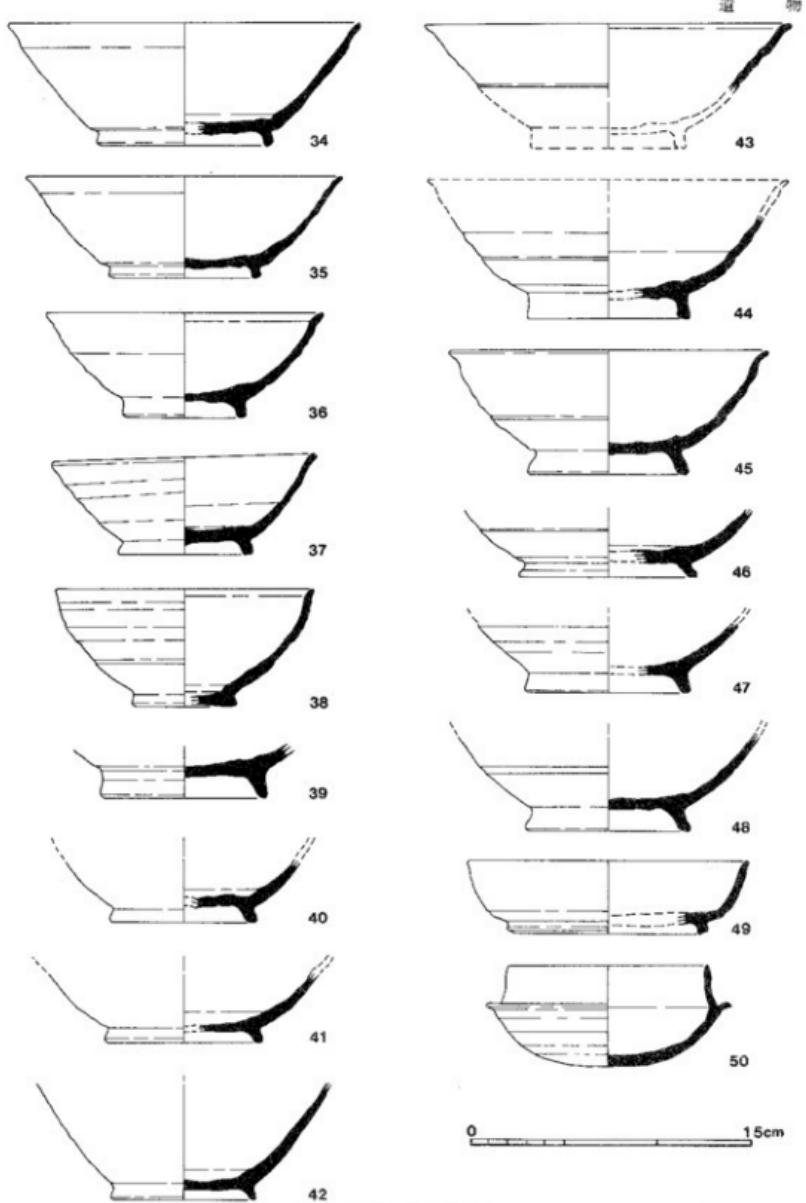


図12 S D 02出土須恵器

造 物



図13 SD 02出土須恵器 (66:1/4)

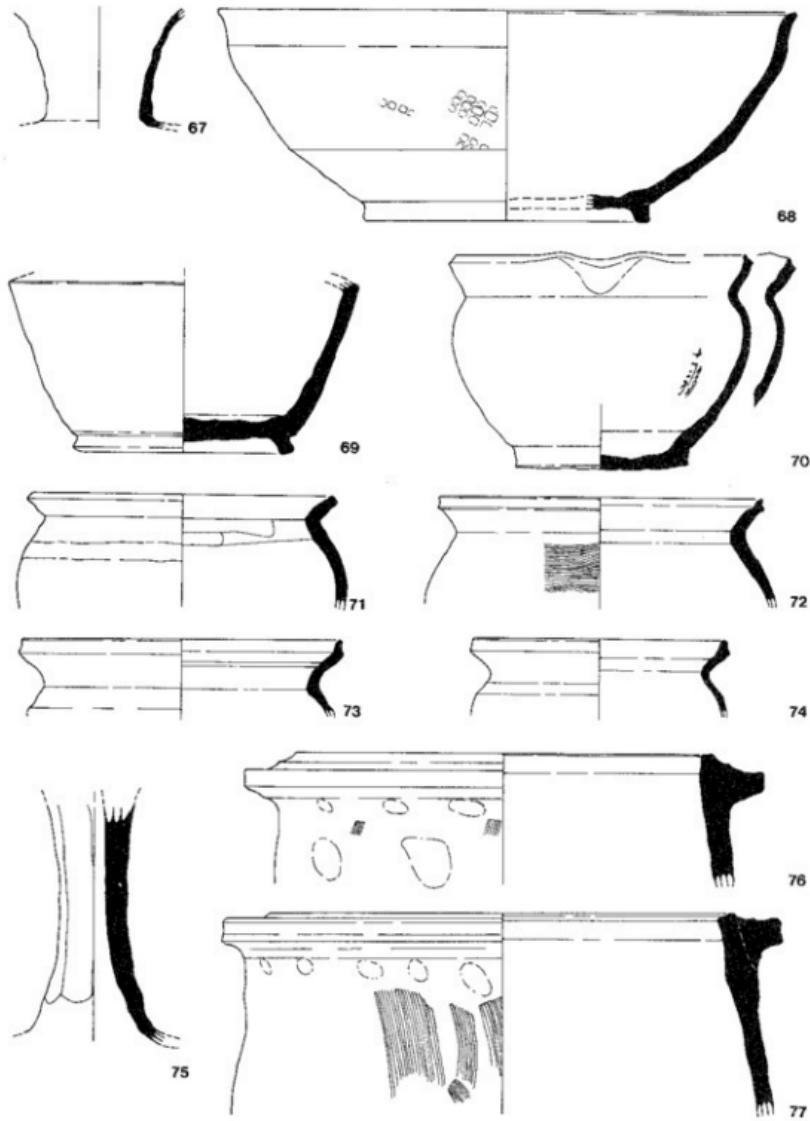


図14 S D02出土土器 須恵器(67~70) 土師器(71~77)

遺 物

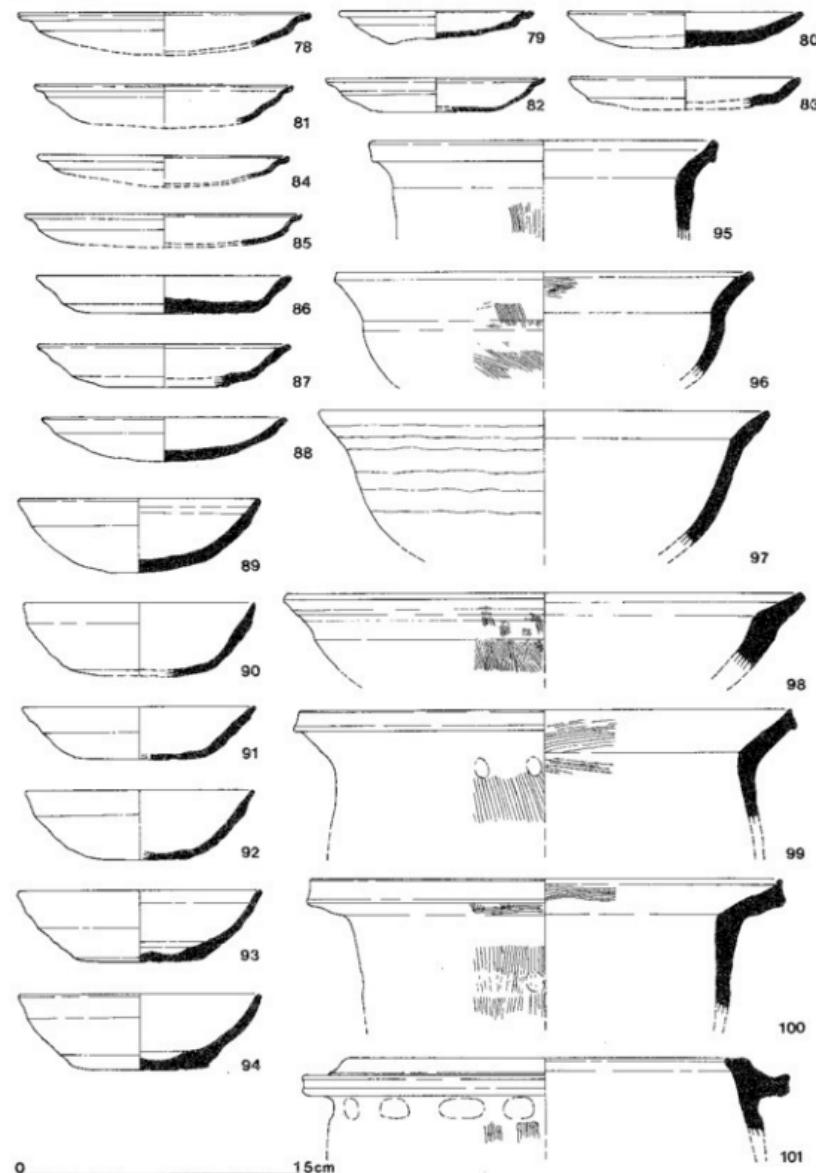


図15 SD02出土土師器 (96, 97, 98: 1/4)

遺物

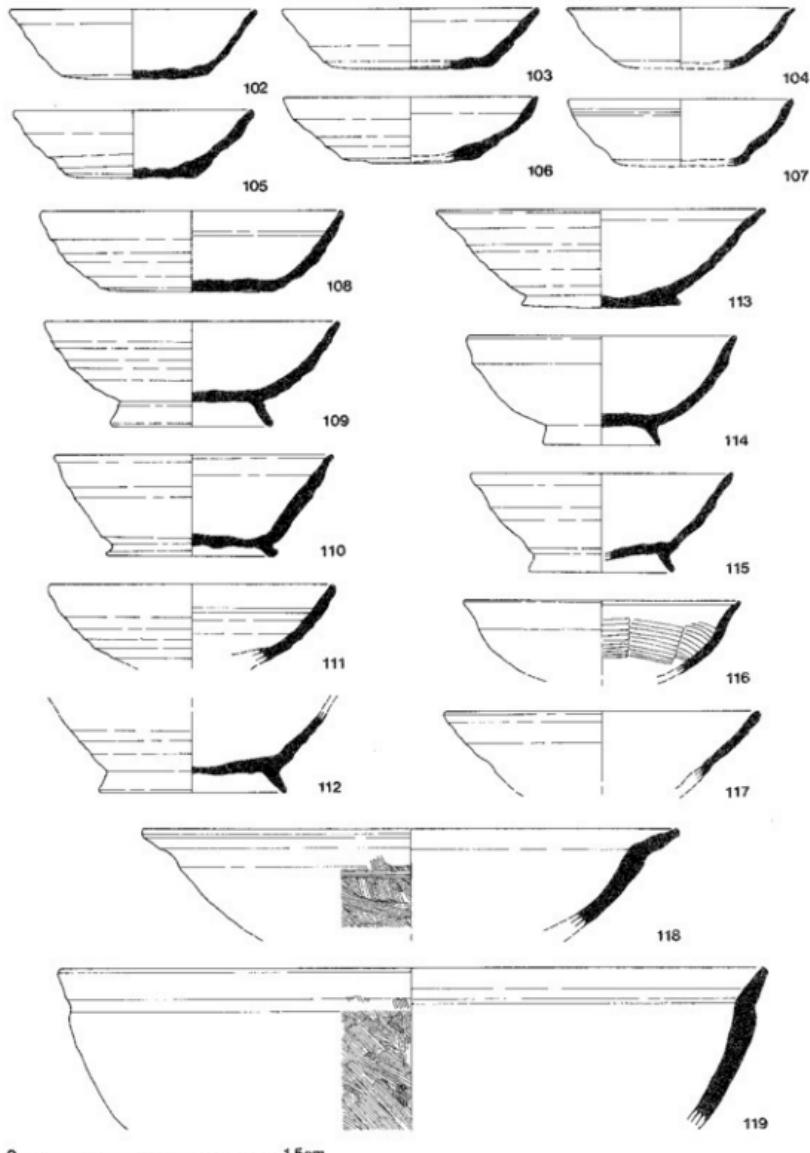


図16 SD02出土土師器 (118, 119: 1 / 4)

## b. 土師器 (図14—71~77, 図15—78~101, 図16—102~119)

S D02出土の土師器には、皿、碗、壺、高壺、甕、土釜、鍋、甕などの器種がある。

## i. 皿 皿は、形態により皿A、皿B、皿Cの3種にわかれれる。

**皿 A** 皿A (78・79・81・82・84・85) は、短い口縁部を外反させ、底部を内側に肥厚させるもので、いわゆる「て」の字状口縁の皿である。法量より皿A I (78・81・84・85) と皿A II (79・82) にわかれれる。皿A I は、口径13.8~15.6cm、皿A II は、口径11.7~12.3cmである。口縁部外面は、一段の横撫でにより大きく屈曲させ、「く」の字形を呈する。それ以下、底部にかけては未調整で、成形時の凹凸を残し、指頭痕を残すもの(78・81)もある。

**皿 B** 皿B (80・83・86・87) は、底部と口縁部との境を屈曲させ、内面と口縁部外面は横撫でを施し、底部外面は未調整である。口縁部たちあがりの屈曲が緩やかなもの (80—83) と底部との境が明瞭なもの (86・87) とがある。外面の横撫では、おおむね一段で口縁端部は単純におわるが、87は横撫でが二段に施されており、口縁端部は、わずかに内側に肥厚させる。いずれも器壁は、5mm前後と厚手である。

**皿 C** 皿C (88) は、まるい底部で、横撫でにより僅かに外反する口縁部からなる。外面上端部に一段の横撫でを施し、それ以下は未調整である。内面は、上半部に横撫で、下半底部は不整方向の撫でを施す。

## ii. 壺、碗 壺と碗は、須恵器と同様で法量などの規準から類別するのは困難であった。このため、土師器については形態から便宜的に壺・碗の類別を行なった。

**壺 A** 壺Aは、法量により壺A I (90~94, 100~107) と壺A II (108) にわかれれる。また、内面に撫でを施すのは一般であるが、外面の調整手法により、a : 口縁上部に横撫でを施し、それ以下、体部、底部は未調整で指頭痕をのこすもの、b : 底部の境

付近までは全面に横撫でを施すものとに分類することができ  
る。壺A I a (90~92) は、口径12.2~12.4cmで、高さ 3.8 cm  
と 2.8 cm がある。前者の90, 92  
は、丸底に近い底部に内彎する  
口縁部がつく。91は、直線的に

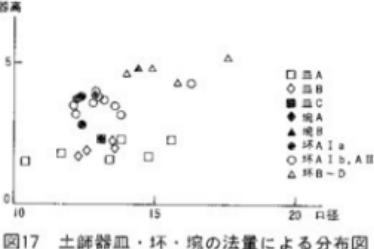


図17 土師器皿・壺・碗の法量による分布図

- 环A I b 外傾する口縁で、径高指数22.5と器高の低い形態である。环A I b (93・94、102~107)は、平らな底部に口縁部が内彎ぎみにならかがるもの(93・94、102~107)と直線的に外傾するもの(102・103)があり、口径12.2~13.8cm、高さ3.2~4.0cmである。口縁端部は、単純に終わるものがほとんどであるが、104は、横撫でが口縁端部までひきあげられ、わずかに外反させている。环A II (108)は、口径16.3cm、高さ4.3cmである。平らな底部にやや内彎する口縁がつき、調整はbの手法で、口縁内外面とも横撫でを施し、撫でによる凹凸がみられる。
- 碗 A 碗A (89)は、口径12.9cm、高さ3.9cmで、半球状を呈する丸底のもので調整手法は、环Aのa手法と同様に内面と口縁外面上部に横撫でを施し、器壁は6mmと厚手である。
- 碗 B 碗B (114・116)は、高台の付くもので、口径14.4~14.8cm、高さ5.8cmである。調整手法は、前記のa手法で、底部内面は撫で、口縁部内面と外面上部は横撫でを施し、それ以下は未調整である。口縁部は、横撫でによりわずかに外反させる。114は、断面三角形の高い高台が付く。116は、口縁端部の内側を凹線上に沿ませており、内面に刷毛目状の調整が見られる。碗Bは、黒色土器と共通する形態をもっている。
- 环 B 环B (109・111)は、环A II に外方へ広がる長い高台を付した器形である。底部外面は未調整、内面は不整方向の乱撫で、その他は内外面とも横撫でを施す。109は、口径15.8cm、高さ5.6cmで、环部は108と法量がほぼ一致する。
- 环 C 环C (110・112・115・117)は、平らな底部に直線的にひらく口縁部がつく环部とやや外方にひろがる高台からなる。高台は、短く、端部が丸味をもち、外端部が上方に向くもの(110)と、ほぼ直線的にやや外方にひろがるもの(112・115)がある。調整は、口縁・体部内外面とも横撫でによるが、底部内外面は未調整である。
- 环 D 环D (113)は、いわゆる平高台の底部に、上外方にやや内彎してのびる口縁部がつくもので、口縁部上方はやや外反する。底部外面をのぞき、内外面とも横撫でを施す。口径17.6cm、底径8.5cm、高さ5.2cmである。
- 环 A I b、环A II b、环B、环Dの器面調整にみられる横撫では、底部外面をのぞく部分に施され、内面は、底部中心から行なわれている。この横撫で調整は、須恵器の环に施されるロクロ撫でと手法が類似しており、土師器においても、ロクロを使用した可能性が考えられる。
- iii 高 环 高环(75)は、脚部の破片で、外面軸部をヘラ削りで面取りし、断面形

が7角形を呈する。裾部は内外面とも横撫でを施すが、外面裾部の横撫でと軸部のヘラ削りとの間には、未調整部分が残る。軸部内壁面は平滑で、中空部が狭く、芯棒による成形手法である。<sup>3)</sup> 図示できなかったが、他に脚部上半の破片があり、同じ手法によっている。いずれも、上部に粘土の剥落している部分があり、厚く粘土を巻きつけた痕跡を顕著にとどめている。胎土は、砂粒の非常に少ない精良なもので、赤色酸化上粒が多く含まれる。焼成も良好で、淡赤褐色を呈する。

- iv 瓢 (71~74・95・99~100) には、A・B二種の形態がみられる。瓢A (71~74) は、体部がまるく、口縁端部を上方につまみ上げるものとつまみ上げないもの (71) とがある。72は、体部外面に横方向の刷毛目調整をおこなうが、他のものは、口縁部とともに撫でによる調整を施す。瓢B (95・99・100) は、細長い体部と外反する口縁部からなり、口縁上端部がつまみ上げられ突出し、端面が垂直に近いものである。口縁部は横撫でにより調整され、体部外面には粗い刷毛目調整がなされる。内面は、粗雑な撫でを施し、頸部に横方向の粗い刷毛目調整をおこなうもの (99~100) もある。口径18.7~26.0cm。
- v 土 釜 土釜 (76・77・101) は、直立する体部の上端近くに鋸をつけるもので、口縁部から鋸へなだらかにつながっている。口縁部と鋸部を横撫でによって調整し、体部外面は粗雑な縦方向の刷毛目調整をなす。内面は、粗い撫でをおこない、外面の鋸部下には貼付けの際の指頭圧痕が残る。口径は、22.0~24.5cmである。いずれも、胎土中には砂粒を多く含んでいる。
- vi 鍋 鍋 (96~98・118・119) は、浅く内彎する体部と、「く」字状に屈曲し上外方にひらく口縁部からなる。口径は、29.7~50.4cmと大小ある。体部内面は不整方向の撫で、外面には不整方向の刷毛目調整をおこない、口縁部は内外面とも横撫でを施す。口縁部内面に粗い刷毛目をのこすもの (96) や、体部が未調整で成形時の粘土継ぎ目を残した粗雑なもの (97) もある。
- vii 罐 図示できなかったが、罐の破片が出土している。移動式の窓で、鋸の付くものである。

#### c. 黒色土器 (図18-120~133, 184~194)

S D02出土の黒色土器は、破片数にして370点あまりあるが、鋸の破片が3点みられる以外、すべて塊である。<sup>4)</sup> 黒色化される範囲は、内面と外面の口縁上端部に限定される「黒色土器A」で、「黒色土器B」は出土していない。

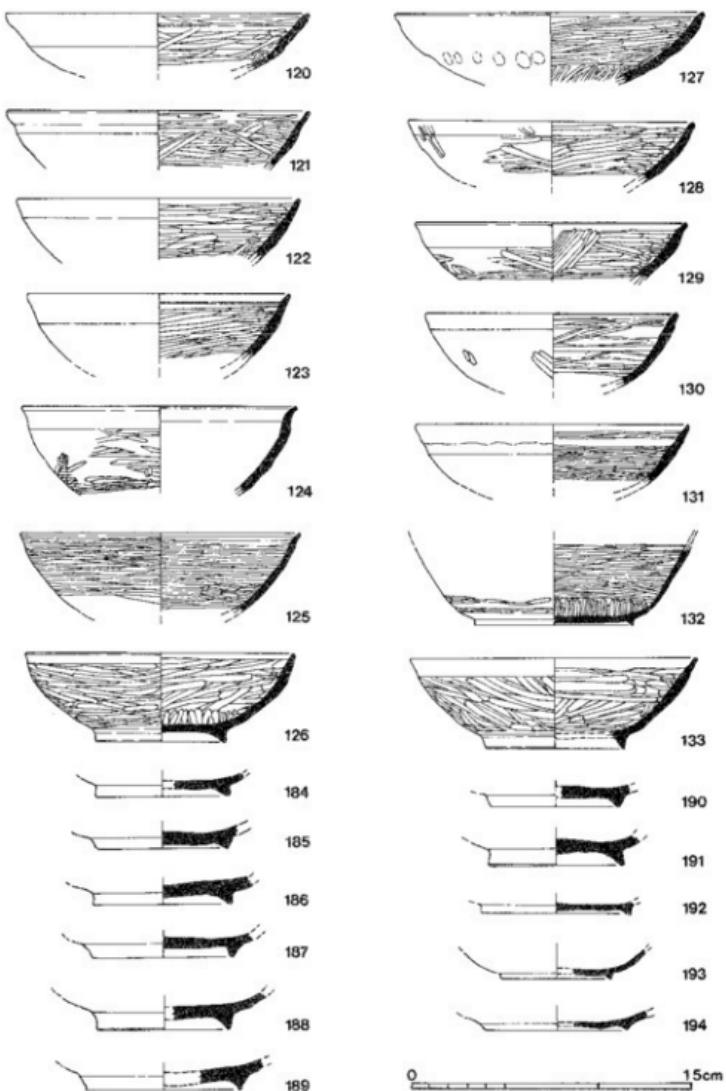


図18 SD 02出土 黒色土器

塊（120～133・184～194）は、形態の異なる2種がみられ、その特徴から、I：器壁が薄手（3mm内）で、ヘラ磨きの単位が細いもの、II：器壁が厚手（4～5mm）で、ヘラ磨きの単位が太いものとに分けられる。底部内面を撫で、口縁部内面と外面上部に横撫でを施し、底面内面は一定方向に、口縁部内面は水平方向にヘラ磨きを加えるのが一般で、今なお光沢をもつものが少なくない。外面の調整には、a：口縁上部の横撫で以下は未調整、b：口縁上部をのぞきヘラ削りを施すものがあるが、bの手法のものは、口縁部の破片総数135のうち1点のみが確認されたにすぎない。また、外面には、0：ヘラ磨きをおこなわないものと、1：ヘラ磨きを施すものとがあり、前者と後者の比は5.5：4.5で、ヘラ磨きを施さないものがわずかに多い。ヘラ磨きを施すものには、底部をのぞくほぼ全面におこなうものと、口縁下部の部分的なものがある。いずれのものにも暗文を施すものはみられない。完形に復元される個体は少ないが、すべての塊に高台が付くものと考えられる。高台は粘土紐貼り付けの断面三角形のもので、塊Iと塊IIでは、高さなど形態に差異がみられる。

**塊 I** 塊I（125・132・192～194）は、薄手のつくりで、内面には細かいヘラ磨きが丁寧に施されている。125は口縁部の破片で、内彎して上外方にひらき、口縁端部がわずかに外反する。口縁端部内側は、凹線状に窪ませている。外面には、口縁端部まで水平方向のヘラ磨きを施す。132は、平らな底部にはほぼ直線的にたちあがる体部で、口縁上端部を欠いている。底部には、細い粘土紐を貼りつけた断面三角形の低い高台がつく。外面は、下半部のわずかなヘラ磨きをのぞき未調整である。

**塊 II** 塊IIは、内彎する口縁部で、上部が外反するものとしないものとがある。内彎の度合にも強いものと僅かなものがみられ、必ずしも画一的でない。口縁内端部に凹線状の園線をめぐらすもの（124）、内端部をヘラ撫で状の浅い沈線を成すもの（123・129・130）がある。外面の調整は、 $a_0$ （120・122・123・127・130・131）と $a_1$ （121・124・126・128・129・133）の両者がある。 $a_1$ の場合、口縁端部までヘラ磨きがおよぶものは少ない。口径13.6～16.6cm。

**胎土** 塊IIには、外面が淡褐灰色を呈するものと、淡赤褐色もしくは濁橙色のものがある。胎土においても、前者は、微砂粒をわずかに含むが精良で焼成もよいが、後者は、砂粒を多く含むという違いがみられる。

## d. 灰釉陶器 (図19--134~141)

灰釉陶器は、S D02出土の土器類の中でも最も少なく、21個体が検出されたにすぎない。塊・皿・瓶の器種がある。高台は、すべてつけ高台で、外面端部を撫で、断面が三日月形を呈し高いもの（138）と、端部がまるく、台形に近く低いものとがある。

## i. 塊

塊（135）は、やや内弯し、端部にわずかな外反がみられる口縁部の破片である。内外面に施釉されるが、漫し掛けのため内面は上半のわずかな範囲に施釉が限られる部分もある。胎土は、黄灰色を呈し、釉の色調は、白濁した淡緑灰色であり、尾北篠岡窯のものと考えられる。

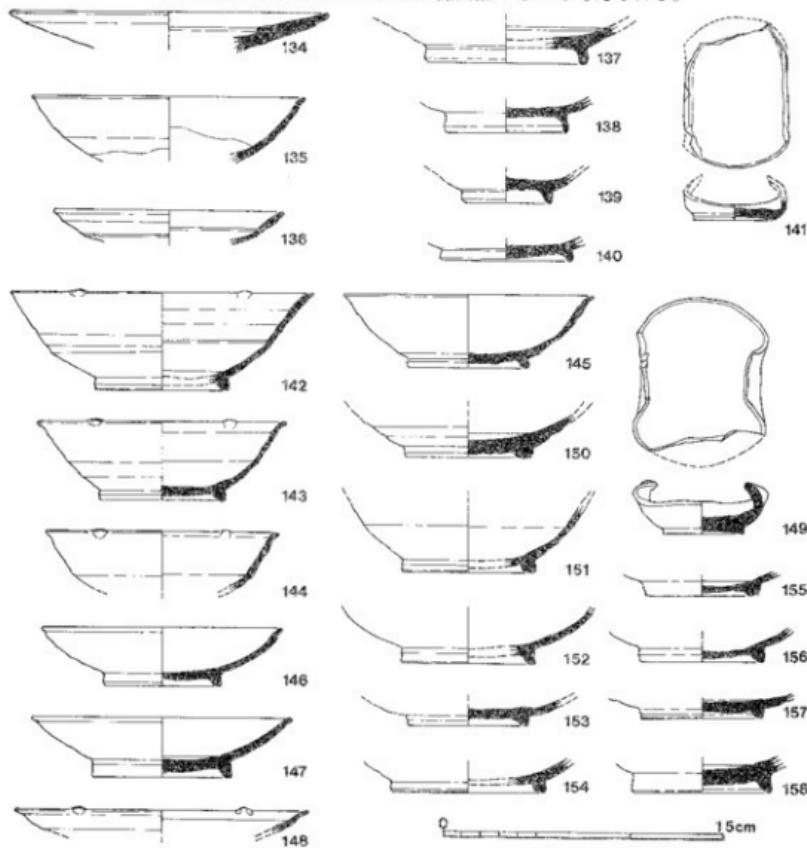


図19 S D02出土灰釉陶器 (134~141) 緑釉陶器 (142~158)

## ii 盆

134・137は、広縁の段皿で、口縁内面の底部に接するところに段をつくり、外面は段をなさない。134は、口径16.8cmで、外面の口縁端付近をのぞきロクロヘラ削りが施され、全面に丁寧なロクロ撫でをおこなっている。施釉は、内面に限られ、淡緑色を呈する。137は、底径8.2cmで、底部外面はヘラ削りをおこない、全面にロクロ撫でが施される。灰釉の施釉は、内面の口縁部に限られ底部には施されない。また、底部内面に重ね焼きの痕跡をとどめる。136は、口径12.2cmの皿で、内面には口縁端より2cmの部分に小さな段をつけている。施釉は内外面におこなわれ、灰白色を呈する。耳皿（141）は、底部外面に回転糸切り痕をとどめ、耳部は欠損しているが、ひだのないものがつくと考えられる。内面には淡緑色の自然釉があり、灰釉は施されていない。成形、調整は、粗雑である。

138～140は、底部の破片である。139の口縁外外面に施釉が認められる以外には、いずれも施釉されていない。図示できないが、瓶の体部の破片が2点出土している。

これらは、釉調、胎土などより、尾北窯と考えられるもの（135～138）が約6割を占め、他に猿投窯（134・141）、美濃須衛窯（139）、東濃系の製品がある。<sup>7)</sup>

## e. 緑釉陶器（図19—142～158）

緑釉陶器は、34個体出土しており、器種は壺・皿に限られる。胎土には、灰白色あるいは暗灰色、青灰色を呈し、緻密で硬質なものと、黄灰色ないし淡赤褐色で軟質なものとがあるが、軟質のものは、3個体が確認されるにすぎない。いずれも精良な胎土であるが、軟質のものには少量の砂粒を含むものがある。釉の色調は、濃緑色～淡黄緑色とあり、施釉の濃淡にも差異がある。

i 壺 壺（142～145・150・151）は、a（142・144・151）とb（143・145・150）にわけられる。

壺 a 壺aは、内彎しつつたち上がり、中位からやや外反し上外方にひらく口縁部をもつ。外面中位の屈曲部は緩やかであるが稜線をなし、いわゆる稜壺の形態をとる。142は、口径15.2cm、高さ5.2cmで、わずかに外反する口縁端部にはヘラ押状の輪花をもつ。良好な焼成で、硬質の青灰色を呈している。削り出しによる高台は、やや外方にむき、削りの凹凸が顕著である。体部下半はヘラ削りされ、内外面のロクロ撫でも丁寧である。ヘラ磨きは施されていないが、内面底部に浅い沈線をめぐらせている。淡緑色の光沢

をもつ軸が、内面と外面の高台内側部まで施されるが、外向底部には施釉されていない。144は、口径12.4cmの輪花をもつ口縁部の破片で、胎土、軸は142と類似する。151は、下半部だけであるが、体部にわずかな稜が認められる。軸は、比較的薄く施され、淡黄緑色を呈する。施釉は、内面と外面の高台外側部までに限られ、高台内部にまでおよばない。胎土、焼成は、硬質、緻密であり、灰色を呈するが、高台内の底部外面と断面は淡黄褐色である。また、器表にも、多くの黄褐色の斑紋が出ている。

**碗 b** (143・145・150) は、内彎ぎみに立ち上がり、口縁端部付近で外反する口縁部と削り出しによる高台からなる。143は、輪花を持ち、口径13.3cm、高さ4.2cmである。焼成は良く、青灰色を呈し硬質である。外面底部と高台部をのぞき、内外面ともロクロ撫でを施しており、外面下半はヘラ削りをおこなっていると思われるが痕跡は明瞭でない。高台および底部外面はヘラ削り痕が顕著で、凹凸がみられる。軸は、光沢をもつ淡緑色を呈し、良好である。高台内部には、施釉されていない。145は、胎土、焼成とも良好で、灰色を呈している。削り出しの高台は、調整されずやや雑である。軸は淡黄褐色で全面に施されるが、非常に薄く、濃淡の斑がみられ、多くの部分は発色していない。器表面には、無数の黄褐色の斑紋がある。底部内面には、重ね焼きの痕跡がみられる。口径13.4cm、高さ3.9cm。150は、下半部の破片である。外面体部、底部は、ヘラ削り痕が顕著に残る。削り出しによる高台は、比較的幅広く、台形を呈し、下端面には糸切り痕が認められる。底部内面には、径6.5cmの沈線が入っている。施釉は、内面と外面の高台外側部までにされ、高台内部には施されない。軸は、比較的厚く施され、濃緑色で光沢をもっている。

碗a、碗bとも、器壁は薄く、丁寧に仕上げられているが、高台および底部外面は、ヘラにより削り出されたままで、粗さがある。外面底部、高台をのぞき内外面ともロクロ撫でを施すが、ヘラ磨きは認められない。

**皿** (146~149) は、内彎する体部に高台が付くもので、口縁端部でわずかに外反する。高台は、削り出しである。146は、口径12.8cm、高さ3.1cmで、胎土、焼成は良く、硬質で灰色を呈する。軸は、淡黄緑色で薄く施され、濃淡のむらが見られる。高台の削り出しは、やや雑で、高台内部は施釉されていない。内面底部には、径5.8cmの高台径とほぼ等しい大きさの重ね焼痕が、施釉後に認められる。147は、口径13.9cm、高さ3.2cmである。高台の削り出しは、碗のものに比べ丁寧で高く、断面形は台形を呈する。体部下半には、ヘラ削りが認められる。内面底部に径6.6cmの沈線がめぐ

らされ、また、施釉後と思われる重ね焼痕が認められる。胎土、焼成は良好で青灰色を呈する。高台内部をのぞき施釉され、淡緑色で比較的厚く施されている。148は、輪花をもつ口縁部で、口径15.7cmである。青灰色硬質で、施釉は薄く、淡緑褐色を呈している。149は、口縁部を折りまげた耳皿である。胎土、焼成は良く、青灰色を呈している。底部には、糸切り痕を明瞭に残している。淡黄緑色を呈する釉は、非常に薄く、ほとんど光沢を持たない。また、鉛黒色に変色している部分も多い。

152~157は、削り出しの高台をもつ底部の破片である。いずれも、胎土、焼成は良好で、硬質である。152・153・156は、青灰色を呈し、淡緑色の釉が施されている。155・157は、灰白色で、淡黄褐色の釉が施されている。これらには、重ね焼痕が底部内面に認められる。154を除き、すべて施釉前のものであるが、154については、施釉後の焼成時のものではないかと思われる。158は、貼り付けの高台で、高台内部の底部外面には糸切り痕が残っている。高台の断面形は、下端部に丸みをもつ三角形で、内側中位は、わずかに段をなす。底部内面には、径5.4cmで沈線がめぐらされている。焼成は甘く、淡赤褐色を呈する。釉は、高台内部を除き、比較的厚く施され、濃緑色である。

S D02出土の綠釉陶器からは、施釉が高台内部に行なわれないこと、ヘラ磨きが認められないこと、削り出しの高台にはやや粗雑さが見られる点などがあげられる。貼り付け高台をもつ154が、その特徴から近江系のものと考えられる以外、他は、いわゆる畿内系のものと考えられ、京都盆地周辺に、その生産地が求められよう。

#### f. 墨書き器 (図20—195)

S D02からは、墨書きのある上器が7点出土した。須恵器4点、土師器1点、灰釉陶器2点にみられ、須恵器・土師器は、壺・鉢の体部外面に、灰釉陶器は、高台内部の底部外面に墨書きがおこなわれている。灰釉陶器の1点については、墨書きが薄れ、辨読できないが、他の6点については、いずれも「東福」と書かれており、もしくは、「東福」の一部分である。55・70・139に書かれた字体は、非常に似ており、「東」と「福」が上下に重なり、つらなるように記している。また、ヘラ書きによる文字が記された須恵器が1点あり、「東」と考えられる。



195

図20 墨書き器「東福」2:3

## g. 土錘 (図21—159~164)

S D02からは、2種の土錘が出上している。いずれも土師質で、溝を有するやや扁平な楕円体のものと、棒状で孔を穿ったものがある。有溝土錘(159・160)は、手づくね成形で、指頭圧痕を多くとどめる。溝は、両側面を縱方向に切り取ってつくり出している。159は、長径6.5cm、短径4.7cm、厚さ3.6cmで、現存の重さ98gである。胎土には砂粒を多く含むが、焼成は良好である。棒状土錘(161~164)は、断面形が円形を呈し、端部近くに孔を穿っている。164の端面には、粘土棒をヘラにより切り離したと思われる痕跡が残る。いずれも欠損しているが<sup>10)</sup>、両端部に孔を対称に穿ったものであろう。大きさは、大小の2種あり、直径2cm弱のもの(161・162)と約1cmのもの(163・164)とに区別できる。大型のものの胎土は、砂粒を多く含み粗いが、小型のものは、砂粒が少なく、比較的精良である。

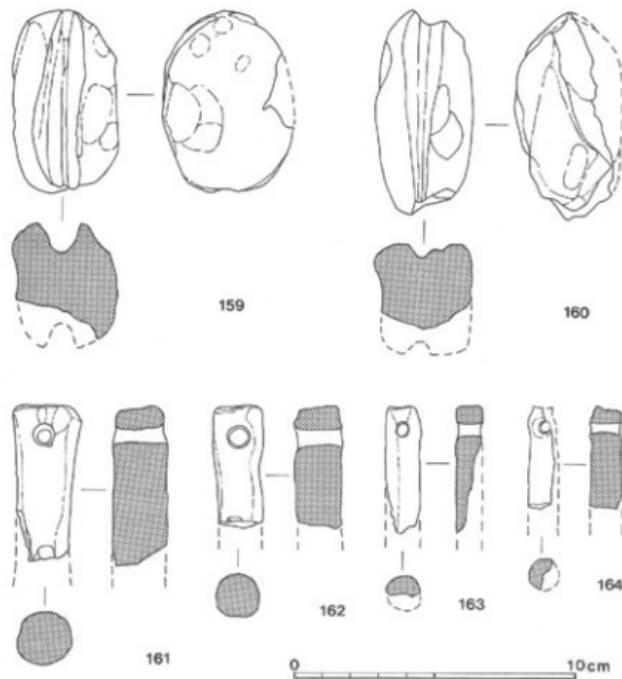


図21 SD02出土土錘

## 3. ピット出土の遺物 (図22-165~179)

土壤、ピットは、60余におよび、これより出土した土器には、須恵器、土師器、黒色土器などがある。しかし、いずれも細片で図示できるものは少ない。これらのなかで、製塙土器がI区のP-38・41・42・44から、まとめて出土した。

出土した製塙土器の多くはチップ状の細片となっており、接合できるものは稀であった。このため、器形を完全に復元できる個体は、見出せなかった。製塙土器(165~179)は、器壁が1.5~3.0mmと非常に薄く、比較的硬質である。口径より体部径が大きく、底部は、平底ぎみの丸底となっている。粗雑なつくりで、歪み、凹凸の日立つものが少くない。外面には、平行叩き目を残すもの(165・170・171・174)があるが、多くは凹凸の著しいもので、すべてが成形時に叩き手法を用いているかは不明である。内面は、平滑に仕上げており、指撫でを縦方向、あるいは横・斜め方向に施している。撫でにヘラを用いたと思われるものもある。胎土は、砂粒を多く含む粗いものが多くを占めるが、砂粒の非常に少ないもの(165・176)もある。後者は、成形なども、比較的良好である。いずれも、外面には、多くの変色や剥離した部分がみられる。剥離は、面的なものや粒状のものがあり、粒状の剥離は内底面にみられるものもある。これらの製塙土器は、古墳時代後期に属し、6世紀初頭のものと考えられる。

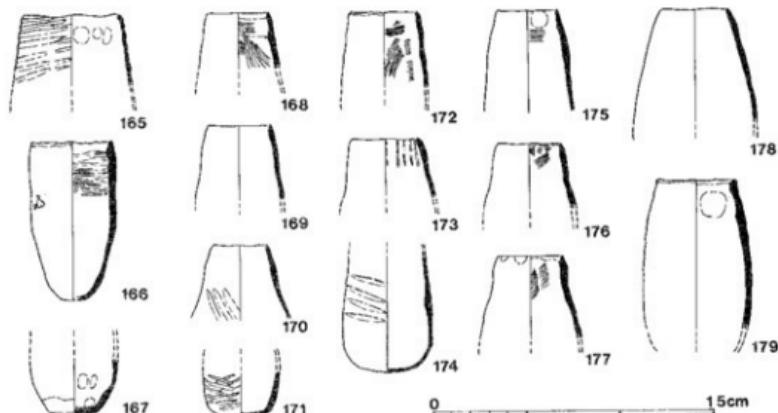


図22 ピット状遺構出土製塙土器  
P-38(165~167・179) P-42(169・174・175・178)  
P-41(170) P-44(168・171~173・176・177)

## 4. 包含層出土の遺物

遺構面直上の包含層から出土したものは、須恵器・土師器・黒色土器・緑釉陶器・土錐・石製紡錘車がある。これらは、古墳時代以降、平安時代に至る遺物である。包含層出土土器は、遺構内出土のものとは対照的に、古墳時代の6世紀代を中心とするものが、出土総数中、高い割合を占めている。特に、須恵器には、遺構内出土のものに見られない良好な個体が出土した。

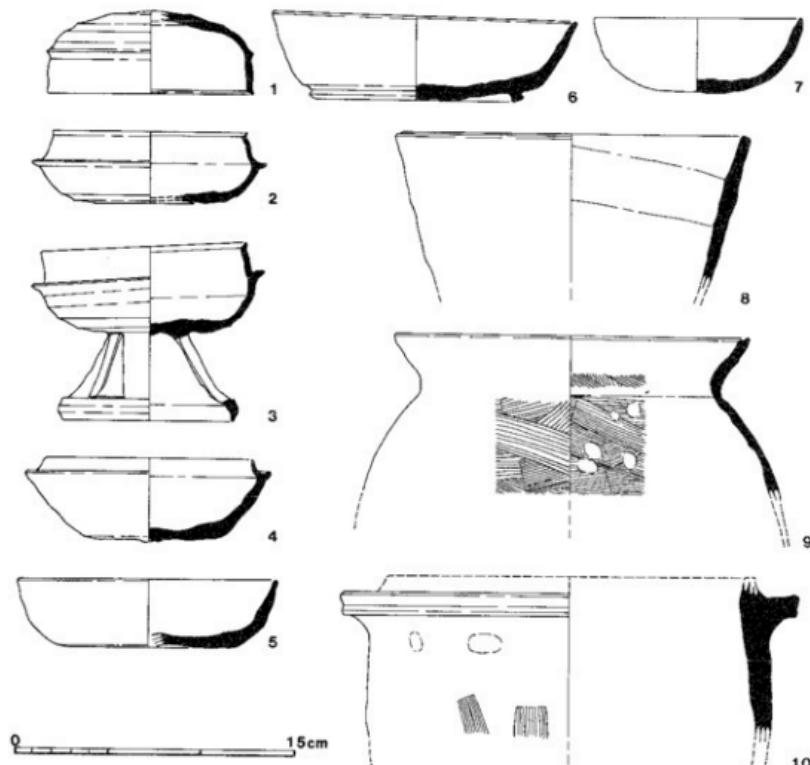


図23 I区包含層出土土器  
須恵器（1～5） 土師器（6～10）

## a. 須恵器 (図23—1～5・図25—12～21)

**环蓋** 环蓋（1）は、天井部を丸く仕上げ、口縁部はほぼ垂直に下り、端部で短く外反する。端部内面には、内傾する凹面の段をもつ。外面の稜は、短く、鋭い。口径11.0cm、高さ4.4cm。12は、口径13.2cm、高さ3.5cmで、天井部はほぼ平坦をなす。稜は短く、直下を回線状に窪ます。口縁端部は、わずかに外反し、内面は内傾する段をなす。14は、短頭壺の蓋で、天井部と口縁部との境の稜は不明瞭である。口縁端部内面には、内傾する段をもつ。19は、内面と外面口縁部をロクロ撫でし、天井部外周にヘラ削りを行なう。口縁端部は、外面をヘラ撫で状に内傾させ、内面に凹線状の窪みを作る。口径14.2cm、高さ3.7cmで、环蓋と考えられる。

**环身** 环身（2・13）は、内傾するたちあがりで、端部

は凹面を呈する。2は、口径10.4cm、高さ3.7cm

図24 包含層出土石製  
紡錘車

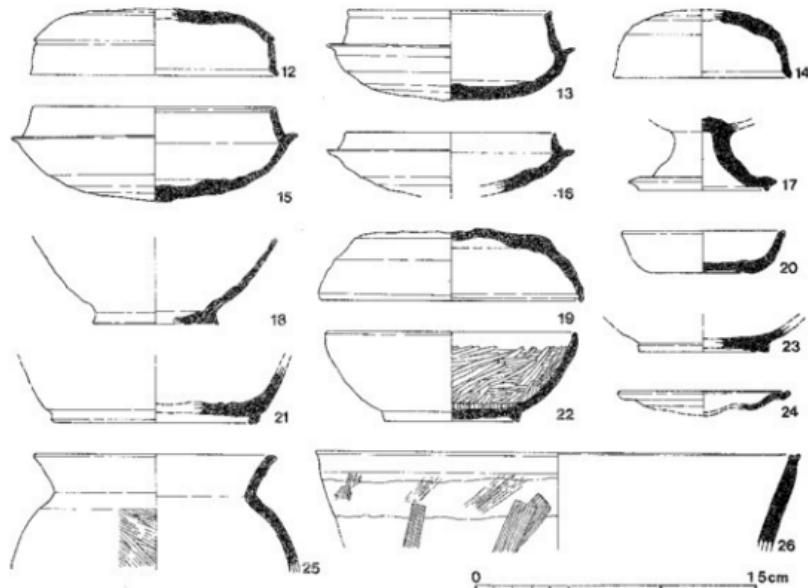
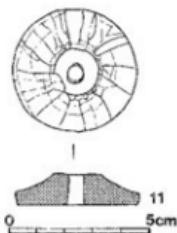


図25 II区包含層出土土器

須恵器（12～21） 黒色土器（22） 緑釉陶器（23） 土師器（24～26）

で、底部は平らである。4は、平らな底部から直線的に外傾して体部が立ち上がり、短い内傾する立ち上がりを有する。有蓋高環（3）は、方形の透しを三方にもつ。たちあがりは直立し、端部は内傾する凹面をなす。口径11.0cm、高さ9.3cm。環（5）は、平坦な底部とやや内傾する口縁部からなり、底部外面を除き、ロクロ撫でを施す。20は、底部糸切りの環である。

蓋環、高環は、『陶邑』編年のI型式後半からII型式にかけてのもので、6世紀初頭から7世紀前半にあてられよう。<sup>13)</sup>

#### b. 土師器（図23-6～10・図25-24～26）

土師器には、環（6）・塊（7）・皿（24）・壺（9・25）・鉢（8・26・土釜（10）がある。环は、高台を付するもので、胎土・焼成とも不良である。皿は、S D02出土の皿Aと比べ、器壁が厚く、口縁部のつくりもシャープさを欠くことから、やや後出のものであろう。鉢は、直線的にやや外傾する口縁部で、端部は撫でにより面をなす。内面は、撫でを施し平滑に仕上げるが、外面は未調整または粗い刷毛目調整で、粘土雜ぎ目痕を残す（26）。

#### c. 黒色土器（図25-22）

口縁部は、内彎したままおわり、断面三角形の高台を付す黒色土器Aの塊である。内面は、丁寧なヘラ磨きを施し、外面は口縁上端部の横撫で以下は未調整である。口径13.4cm、高さ4.8cm。<sup>14)</sup>

#### d. 緑釉陶器

包含層からは、1点のみ出土した。精良な胎土で、淡赤褐色を呈し軟質である。底部外面が凹面を成す切り高台で、淡黄褐色の釉が全面に施される。S D02出土の緑釉陶器より、やや先行する時期が考えられる。

#### e. 土錘・石製紡錘車（図26-28・29・図24-11）

土錘（28・29）は、孔を有する断面円形の棒状土錘で、いずれも、径1.3cm程度の小型である

石製紡錘車（11）は、直径4.4cm、重さ27.8gで、上面は丁寧な削りによって仕上げるが、削り痕は明瞭である。6世紀前半に属すると考えられる。

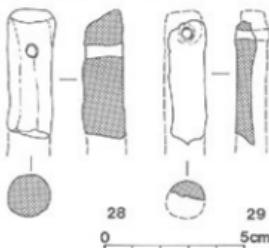


図26 包含層出土土錘

## 註

- 1) S D02出土土器の破片数による割合である。ただし、平安時代以前の土器は僅少ではあるが、細片から厳密に区別することは困難であったため、それらを含めた總数となっている。このため、平安時代の土器だけの比率ではなく、概算で示した。
- 2) 土器の類別、各器形および手法に付した記号は、本書の整理上、付けたものである。
- 3) 田中康「畿内」『日本の考古学』VI 1967, 町田章他『平城宮発掘調査報告VI』(奈良国立文化財研究所学報第23編) 奈良国立文化財研究所 1978
- 4) 前掲書(奈良国立文化財研究所)等で、環Bに分類されるものも、ここでは塗としている
- 5) 註3と同じ
- 6) 註3と同じ
- 7) 灰釉陶器の整理にあたっては、森田稔氏の協力を得た。
- 8) 鳥田貞彦「近江国蒲生郡に於ける窯址特に釉薬陶器について」『考古学雑誌』第10巻第3号 1919,  
丸山竜平「甲賀郡水口町春日山の神古窯跡調査報告」『昭和48年度滋賀県文化財調査年報』滋賀  
県教育委員会 1975
- 9) 寺島孝一「平安京出土の縁釉陶器」『考古学雑誌』第61巻第3号 1976
- 10) 人野左千夫「有孔土鍤について」『古代学研究』93 古代学研究会 1980
- 11) 近藤義郎「土器製塩の話(2)」『考古学研究』第26巻第4号 1980
- 12) 近藤義郎他『日本塩業大系(史料編 考古)』日本塩業研究会 1978
- 13) 中村浩「和泉陶邑窯出土遺物の時期編年」『陶邑』III 大阪文化財センター 1978
- 14) 註5と同じ

## VI まとめ

今回の調査では、弥生時代から平安時代に至る遺構が検出され、遺物も多種、多量に出土した。本章では、出土遺物を中心に、神楽遺跡について考えるところを述べ、まとめとした。

## 1. SD02出土の土器について

溝状遺構SD02からは、古墳時代から奈良・平安時代に至る土器が出土したが、前述したように、これらは堆積層序による、時期的区分が困難であった。平安時代以前のものは僅少で、大半が平安時代に属するものであり、施釉陶器をはじめとする各種の土器類からは、時期的問題と合わせ、遺跡の性格について、示唆が得られるものと思われる。以下、平安時代の土器について、種別ごとに若干の考察を加え、検討してゆきたい。

## a. 須恵器

須恵器のうち、出土量の比較的多い壺・碗類は、成形・調整の手法から大きな差異を求めるることはできないが、法量・器形などの形態から分類が可能なことは、第V章において述べたとおりである。

**壺A I** 壺A Iは、ヘラ切り平底の壺で、器形の著しい差異は少ないが、a・b・cの3形態に分類したように、径高指数で示される器高の比率が、aは相対的に低く、b-cと高くなる。それにしたがい、体部の内彎度が大きく体部と底部の境が不明瞭になるという傾向がとらえられる。また、調整の精粗にも、aが比較的丁寧であるのに比べ、b・cと粗になることも認められる。つぎに、壺(碗)Bについてみると、a・bの2形態の差異は顕著である。

壺B I aは、平底の直線的に立ち上がる体部で、底部のやや内方に高台を付す壺の形態をもつものであり、壺(碗)B I bは、稜塊の系統をひくと考えられるものである。この両者は、必ずしも同一系譜に置けないが、形態から、a形態が相対的に古い要素を持つと考えられる。

**類例** 壺A Iと類似する壺は、10世紀代におさえられる平安京左京四条一方暗褐色砂泥層より出土している。また、窯址では、兵庫県三田市青野ダムA E86号窯址<sup>1)</sup>や加古川市礼馬古窯址群<sup>2)</sup>、相生古窯址群<sup>3)</sup>などに、類似した形態がみとめられる。青野ダムA E86号窯址は、壺蓋・壺身・皿・壺・鉢などを焼成しており、9世紀末~10世紀初めに考えられている。このうち平底

青野ダムA E 86号窯址

の环は、环A I a と环A I b の一部に極めて似た形態で、成形・調整手法にも差異はみられないが、体部・口縁部の形態から、S D02出土の环A I a が僅かに後出のものと推測される。また、同窯址では、蓋环のセット関係がみられるが、S D02からは、それが見られないこともひとつの指標となろう。また、稜塊的な形態をとる环(塊) B I b については、10世紀中頃以降とされる札馬5号窯址出土の塊に類似したものがみられる。札馬5号窯址では、ヘラ切り平底の塊、平高台の塊とともにこの種の塊を焼成している。これらは、环B I b と基本的には同一形態とみられるが、S D02出土のものと比べ、稜線のつくり出し、器面の調整などは粗く、高台径も小さいなどの差異がある。また、内底部の見込み部分が明瞭な凹面をなし、底部が糸切りである点は、环B I b がヘラ切りと考えられる点と相違する。<sup>6)</sup> 成形・調整からは、S D02出土の环B I b が先行するものと思われるが<sup>7)</sup>、生産地の違いが考えられ、時期差によるものかは明らかでない。なお、环(塊) c は、神出古窯址群など東播地方の窯址において生産されたことが知られるもので、11世紀後半に位置づけられよう。

### b. 土 師 器

須恵器と同様に、出土量の多い皿・环・塊類を中心にみることにする。

**皿 A** 皿は、3形態に分類した。このうち、特徴的な成形・調整手法による皿Aは、10世紀を中心とする年代にあてられるものである。薬師寺西僧房や平安京左京内膳町S K18出土の皿より口縁部の外反が弱く<sup>8)</sup>、やや先行する形態で、10世紀中頃とされる平安京左兵衛府S D1<sup>9)</sup>、内膳町S K19<sup>10)</sup>のものに近似する。皿B・皿Cは、皿Aに比べ、厚手で成形・調整も稚拙であり、形態的には後出のものである。皿Aが、いわば畿内のものに対し、皿B・皿Cには、在地的色彩が強い。

**环 A** 环Aは、手法からa・bの2形態があり、それを基に分類を行なった。<sup>11)</sup> 环A I a・塊Aにみられる手法は、平安初期の平城宮SE311B様式の环にみられ、皿Aの手法へと繰がるものであり、いわば伝統的手法に依っている。一方、环A I b・环A IIは、a形態のものとは手法を異にする。底部外面を除き横撫でを施すが、その調整は、回転運動を利用したと思えるもので、むしろクロロ撫でとすべきものである。しかし、底部には、切り離し痕は認められず未調整で、台板痕らしきものを残すものがあり、器形的にも須恵器环Aとは異なり、土師器としての独自性がうかがえる。环B～Dについても、手法からは2形態あり、环B・环Dは、环A I b に通じるものである。なお、神戸市北別府遺跡において、平安時代の變形土器を転

用した藏骨器内より、土師器坏2点が出土しているが、これらの坏は、底部にヘラおこし痕をとどめ、成形・調整など形態的に S D02出土須恵器坏<sup>15)</sup> A I に類似するものである。また、宝塚市旧清遺跡においては、時期が特定できない問題はあるが、平安時代とされる同形態の坏と共に、糸切り底の坏も出土している。資料的にも少なく、今後の検討に期さなければならぬが、北別府遺跡出土例などにみられる坏は、S D02出土の坏A I より後出であると考えられ、S D02にみられる坏・塊類より、次第に須恵器の手法を取り入れられたと推測したい。

甕B・土釜については、土釜（101）に、僅かな形態の差異がみられ、やや下る時期差が考えられる以外、同一時期のものであろう。尼崎市金楽寺貝塚出土のものなどに、多くの類例がみられ、ほかの遺跡との比較からも10世紀中頃以降に置かれよう。

#### c. 黒色土器

黒色土器は、2形態に区別した。ただし、II類とした124は、両類と異なる点がみられ、3形態とすべきかもしれない。I類は、薄手の器壁と高さ0.3cm内の細く低い高台から成り、ヘラ磨きは細かく丁寧に施され、口縁内端部に凹線状の窪みを持つものがある。一方、II類は、器壁が厚く、径7.0~7.5cm、高さ0.5~1.0cmの安定した高台を付し、I類に比べ粗く、太いヘラ磨きが施される。また、口縁内上端部をヘラ撫で状に押さえ、浅い段状の沈線を成すものもあるが、多くは口縁部を摘まみ細くしたり、凹線状の窪みを持たず、そのまま丸くおわるという対照的な特徴がある。

I類　　I類は、大きく見れば、平城宮跡や平安京内各遺跡出土の黒色土器塊にその系譜を辿ることができ、いわば伝統的な形態であると言えよう。S D02出土のI類とした塊は、出土点数が少なく、完形復元ができるものがないことから、他遺跡出土のものとの比較が難しいが、以下のことが考えられる。142は、平城宮S D 650 B出土の黒色土器坏Bに形態的には似るが器高は相対的に高く、暗文が見られない点など後出的で、大概、10世紀代に考えられ、平安京左兵衛府跡S D 1出土の黒色土器塊に、器形・手法などが近似している。他も、ほぼ同時期のものと考えられるが、高台径が小さく、体部に丸みを持つ125・193は、やや時期が下がるものと思われる。

II類　　II類は、I類よりも形態的には後出的である。また、I類が奈良時代からの伝統を残し、平安京内においても類例が求められる点など、いわば畿内中心部的な色彩の強いものであるとすれば、II類は存地性を持ち、生産地の違いを感じさせる。平安時代後期とされる大阪市長原遺跡S E 101、

S E 023 や藤井寺市蛭里遺跡出土のものなどに類似した形態が求められ、<sup>21)</sup> 河内・摂津を中心に分布が求められるかも知れないが、これまで報告された類例に乏しく、また、本遺跡周辺での黒色土器検出例も皆無に近いため、今後に期さなければならない問題である。なお、周辺では、尼崎市金楽寺貝塚に黒色土器 A の塊が見られるが、これらは、I 類もしくは、124 に類似するもので、9 世紀後半から10 世紀に考えられている。

d. 灰釉陶器・綠釉陶器

灰釉陶器は、出土数が少なく小破片であるが、前述のように、尾北窯、猿投窯、東濃系などの製品がみられる。これらのうち、段皿（134）が、折戸53号窯式<sup>22)</sup>による黒笠90号窯式である以外は、折戸53号窯式に比定される。

綠釉陶器は、硬質で、削り出しによる輪状高台の塊・皿が主体である。これらは、ヘラ磨きの痕跡がみられず、施釉が高台内底部に及ばないなどの手法の省略がみられ、高台にも削り出しの際の凹凸が著しいものが多い、塊は、平安京左兵衛府跡 S D 1 出土のものと器形的に類似するが、以上の点から、少し下る時期におさめられよう。これらの綠釉陶器の生産地については、各地の古窯で出土したものとの比較を十分に行なっていないため詳細には触れないが、山城（小塙窯・石作窯）あるいは丹波（篠窯）に求められよう。また、今回出土の綠釉陶器34個体中、近江系は1点みられるだけであった。

e. 土 錘

有溝土錘 S D 02 出土の有溝土錘は、偏平な楕円体の狹側面長軸方向に一条の溝を有するもので、その初現は古墳時代後期にもとめられ、盛期は奈良時代以降に考えられている。そして、草戸千軒町遺跡、鞆遺跡などの出土例から、<sup>23)</sup> 棒状土錘<sup>24)</sup> 中世に至るまでの存在が知られる。棒状土錘は、双孔棒状土錘などと呼ばれる形態のもので、弥生・古墳時代から中世に至るまで見られる。このため、S D 02 出土の土錘について、その形態だけから時期を特定することは難しいが、他の遺物からみて平安時代におくのが妥当である。

S D 02 出土遺物は、一括の同時期資料として扱えないために、種別毎の各形態について述べてきたが、次に、これらの遺物について、上記をまとめ、時期を推定してみたい。

日常雑器である須恵器・土師器の皿・壺・塊類にみられる形態の差異は上記した点から、時期的変化による新古関係の2時期と捉えたい。須恵器

壺A I a・壺B I a・壺B II aと土師器皿A・碗A・壺A I a・壺cを古い段階に、新しい段階に伴うものとして、須恵器壺A I b・壺B I b・壺c・壺II bおよび壺A・鉢A・鉢Bと、土師器では皿B・皿C・壺A I b・壺A II・壺B・壺Cなどがおかれる。また黒色土器I類・II類についても同様である。施釉陶器は、一部、(古)におけるが、おむね(新)に伴うものである。「東福」と類似した書体で墨書きされた土器には、須恵器壺A I b・鉢B・土師器壺A I b・灰釉陶器碗(折戸53号窯式)があり、「東福」の意味が解明されていない点など問題は残されるが、其伴関係のひとつの指標としたい。また、土器の様相として、(古)の時期は、日常雑器においても畿内的な要素を持ち合ますが、(新)では、一層地域色を強くする傾向が窺える。

時期 この2時期について、種別ごとに他遺跡の出土遺物との比較を試みたが、これらより、古—10世紀中葉から後葉、新—10世紀後葉から11世紀初頭に位置づけたい。

## 2. 遺跡について

今回検出された遺構は、土壙、溝状遺構などであり、それ自体から遺跡の性格を導き出すのは難しい。

弥生時代 弥生時代に属する遺構は、自然流路と考えられるS D01とピット1ヶ所が検出されたにすぎなかった。しかし、S D01から比較的多くの土器が出土したことなどから、近隣に中期後半から後期にかけての集落址等の遺構存在の可能性を窺わせる。

古墳時代 古墳時代後期の遺物が包含層より良好な状態で出土しているに拘らず、調査地内では、ピットが検出されただけであった。このうち、製塩土器を出土したP—38・42・44などは、いずれも灰層や火を受けた痕跡は認められず、欠損した土器を廃棄したと思われる状態であった。製塩を直接裏付ける遺構は検出されなかったが<sup>30)</sup>、この地で、製塩が行なわれていたことは、十分に推測し得ることである。また、6世紀初頭以降の遺物が包含層より多く出土することから、居住地を付近にもとめることも無理ではないであろう。

平安時代 溝状遺構S D02は、その埋没時期を10世紀中葉から11世紀初頭にまとめることができ、包含遺物の出土状況より、長期に存在していた可能性は少ない。これより出土した遺物には、墨書き土器を含む、土師器・須恵器の日

常雜器のほか、灰釉陶器・綠釉陶器がある。綠釉陶器については、近年出土例も増加し、寺院・官衙・祭祀関係の遺跡のほか、集落址において認められるようになった。しかし、これらは、日常の食器類としての使用は考え難く、墨書き器の出土と合わせ、おのずと遺跡の性格も限定されよう。

「東福」については未解明であり、神楽遺跡について、文献史料から直接得られるものはない。また、今回検出された遺構からも、遺跡の全体像を推測し、把握することはできなかった。平安時代の遺跡の広がりについては、立地から、今回の調査地より北側にもとめられ、北0.4kmの旧山陽道推定地付近までの範囲を想定したい。

### 3. 結びにかえて

今回の調査により、弥生時代から平安時代まで、断続的ではあるが、遺跡の存在を知りえた。しかし、調査は遺跡全体からすれば、ごく一部分にしかすぎず、全貌を推測しえるだけの資料を得るに至らなかった。今後の神楽遺跡および周辺地の調査・研究に期することは多く、本遺跡について明確にされることを期待する。

神楽遺跡の調査は、これまで、いわば遺跡の空白地域であった市街地に、多時代にわたる遺跡の存在を教えてくれた。地下鉄建設工事を契機に、市街地に眠る遺跡に対して調査の日が向けられるようになって、まだ日は浅い。今後、既成市街地の再開発に際し、新たな遺跡の発見が期待される一方、消え去る遺跡がひとつ増える矛盾をも含んでいる。この調査の記録が遺跡の語る事実を伝え、今後、当地域の歴史を考え、明らかにしてゆくための一助となれば幸いである。まとめに際し、他遺跡との比較資料等の不十分さや短絡的な点が多く見受けられようが、大方のご批判、ご教示を願い、結びとしたい。

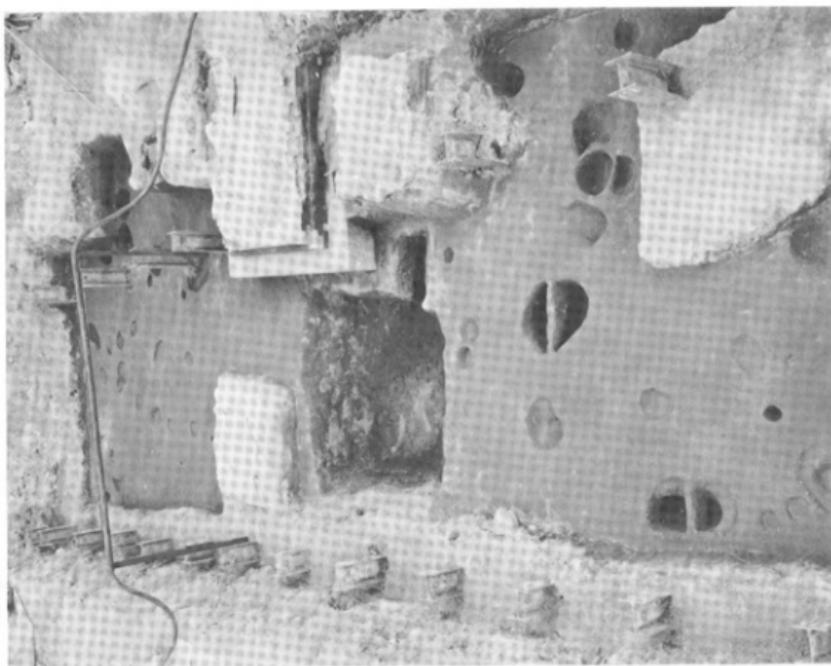
## 註

- 1) 田辺昭三・古川義彦編『平安京発掘調査報告—左京四条一坊一』 平安京調査会 1975
- 2) 吉田昇 「△E-86(窯址) 調査概要」 『三田市・青野ダム建設に伴う埋蔵文化財調査概報』 兵庫県教育委員会 1978. 吉田氏の御好意で実現することができた。また、時期については、御教示を受けた。
- 3) 中村浩 『礼馬古窯跡群発掘調査概要』 大谷女子大学資料館・加古川市教育委員会 1981. 「礼馬古窯跡群 55年度発掘調査」 『文化財ニュース』第24号 加古川市教育委員会 1981

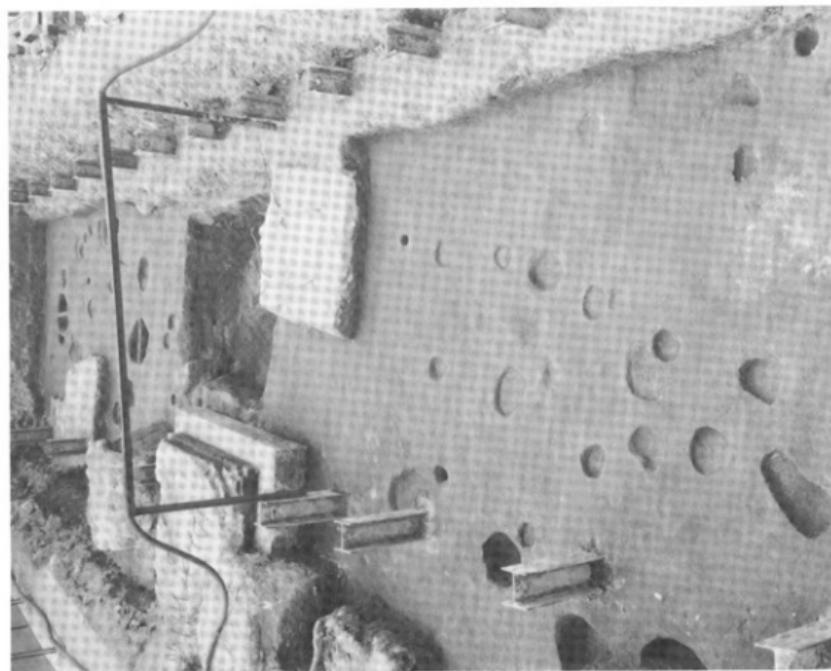
- 4) 松岡秀夫・河原隆彦他『入野滋跡発掘調査報告』 1981, 森内秀造「柏生・竜野古窯址群について」『魚住古窯ニュース』第12号 兵庫県教育委員会 1980
- 5) 註3に同じ
- 6) 加古川市教育委員会 同本一氏の御好意により、一部を実見することができた。
- 7) 神戸市教育委員会が、昭和53年度より園場整備事業に伴い、発掘調査を実施している。
- 8) 宇野隆夫 「京人病院跡出土の上器—古代末から中世—」『京都大学構内遺跡調査研究年報』昭和52年度 京都大学埋蔵文化財研究センター 1978
- 9) 「薬師寺西僧房地区的発掘調査」『昭和49年度平城宮跡発掘調査部概報』奈良国立文化財研究所 1975, 吉田恵二 「薬師寺出土の施釉陶器」『日本美術工芸』第446号 1975
- 10) 平良泰久他 「平安京跡（左京内膳町）昭和54年度発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概要（1980—3）』京都府教育委員会
- 11) 平尾政幸 「平安京左兵衛府跡」『京都市埋蔵文化財研究所概報集1978—II』 1978
- 12) 註10に同じ
- 13) 「平城宮跡発掘調査報告IV」（奈良国立文化財研究所学報第17冊）奈良国立文化財研究所 1962, 『同V』（1976）で、e手法による环は、平城宮IVの時期に出現するとされる。
- 14) 神戸市教育委員会、昭和52年度調査
- 15) 高井悌三郎他 「摂津国旧清道跡」（宝塚市文化財調査報告第5集）宝塚市教育委員会、旧清道跡発掘調査団 1973
- 16) 須恵器の技法を取り入れ製作されたと考えられる土師器は、各地域でみられる。山陽地方においては、<sup>①</sup>山口県秋根遺跡で、9世紀後半にはヘラ切り底の环・皿が存在し、10世紀に入ると糸切り手法を導入した土師器がみられる。広島県サブ遺跡F区No.3土壙や草戸千軒町遺跡の、11世紀代とされる环は、ロクロ調整、底部ヘラ切りが認められる。また、岡山県美作国分寺跡出土の平安時代中頃におかれている环は、ロクロ成形とされる。そのほか、東北・関東地方では、9世紀以降、土師器にロクロ整形の伝統な接用がなされ、やがて須恵器技法そのものによる製作が成されたことが知られている。土師器生産は、地域的特性が強く、同一系譜上には置けないが、各地において平安時代には、須恵器製作の技術が導入された傾向を示すものであろう。
- ①伊藤照雄他 「秋根遺跡」 下関市教育委員会 1977
- ②河瀬正利他 「サブ遺跡」『山陽新幹線建設地内遺跡発掘調査報告』広島県教育委員会 1973
- ③『草戸千軒町遺跡—第9・10次発掘調査概要』、『同—第15~17次発掘調査概要』 広島県教育委員会 1973, 1975
- ④志道和直 「平安時代の土器生産」 調査研究ニュース『草戸千軒』No.40 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所 1976
- ⑤森哲夫他 「美作国分寺跡発掘調査報告」 津山市教育委員会 1980
- ⑥岩崎卓也 「東日本の土師器」『世界陶磁全集2 日本古代』 1979

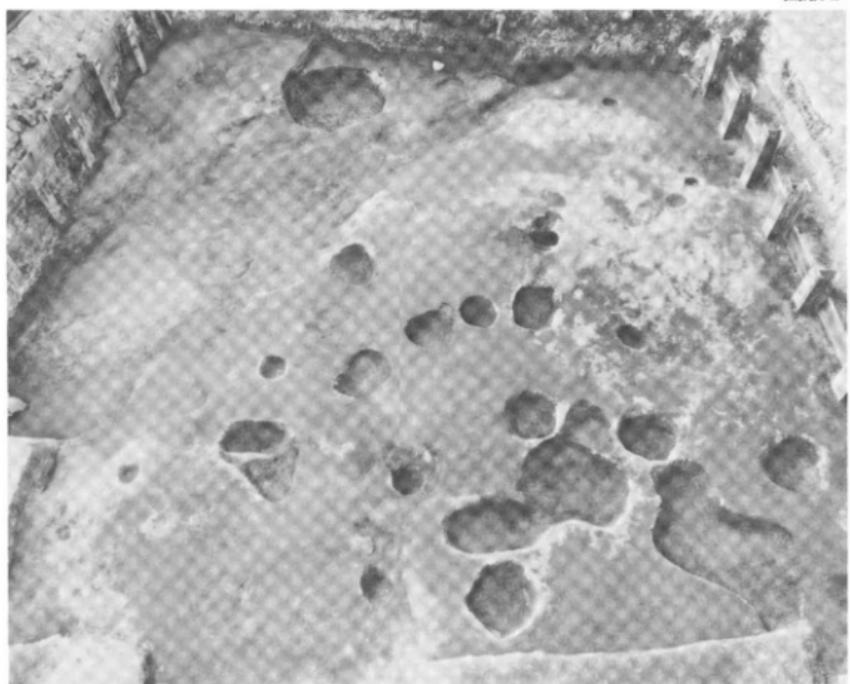
- 17) 兼康保明他 「尼崎市金楽寺貝塚I」 尼崎市教育委員会 1976
- 18) 『平城宮跡発掘調査報告VI』 (奈良国立文化財研究所学報第23冊) 奈良国立文化財研究所 1978
- 19) 註11に同じ
- 20) 井藤徹他 「長原」 大阪文化財センター 1978
- 21) 尾上実 「狹山遺跡・輕里遺跡発掘調査概要」 大阪府教育委員会 1978
- 22) 註17に同じ
- 23) 橋崎彰一・井上喜久男編 「白瓷編年図表」 『世界陶磁全集2 日本古代』 1979
- 24) 註11に同じ
- 25) 寺島孝一 「平安京出土の綠釉陶器」 『考古学雑誌』 第61巻第3号 1976。寺島氏の御好意により、平成博物館所蔵の遺物を見渡すことができた。
- 26) 安藤信策他 「国道9号線バイパス関係遺跡昭和52年度発掘調査概要」 『埋蔵文化財発掘調査概報 1978』 京都府教育委員会
- 27) 大野左千夫 「有溝土鍤について」 『古代学研究』 86 古代学研究会 1978
- 28) 『草戸千軒町遺跡』 1974・75・77など 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所
- 29) 松下正司他 「鞆」 福山市教育委員会 1980
- 30) 大野左千夫 「有孔土鍤について」 『古代学研究』 93 古代学研究会 1980
- 31) 近藤義郎 「土師器塗の話(1)」 『考古学研究』 第26巻第3号 1979
- 32) 神戸市内での綠釉陶器出土遺跡は、これまで、吉田南遺跡、出合遺跡、黒田遺跡(西区)、郡家大庭遺跡(東灘区)、鞍谷南遺跡(北区)の5例が知られている。
- 33) 橋崎彰一 「彩釉陶器製作の伝播」 『名古屋大学文学部研究論集 XIV 史学15』 1967。同『三彩・綠釉』(日本陶磁全集5) 1977

I 区全景（西から）

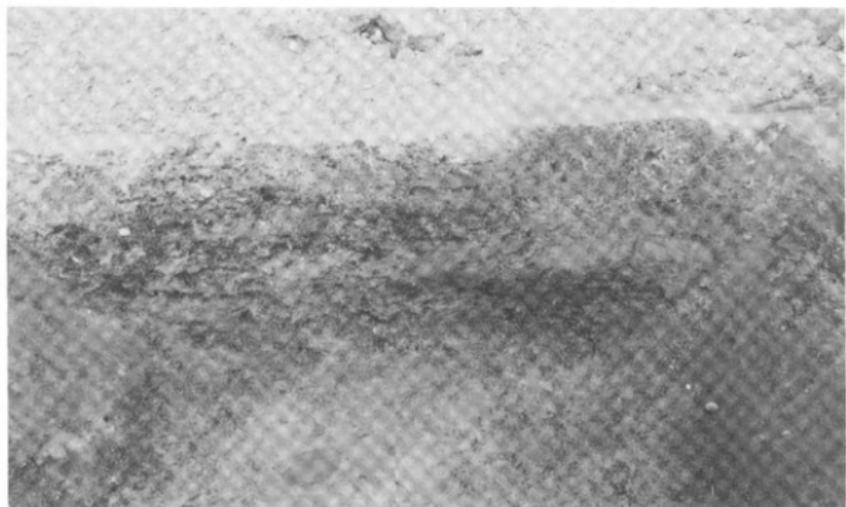


I 区全景（東から）

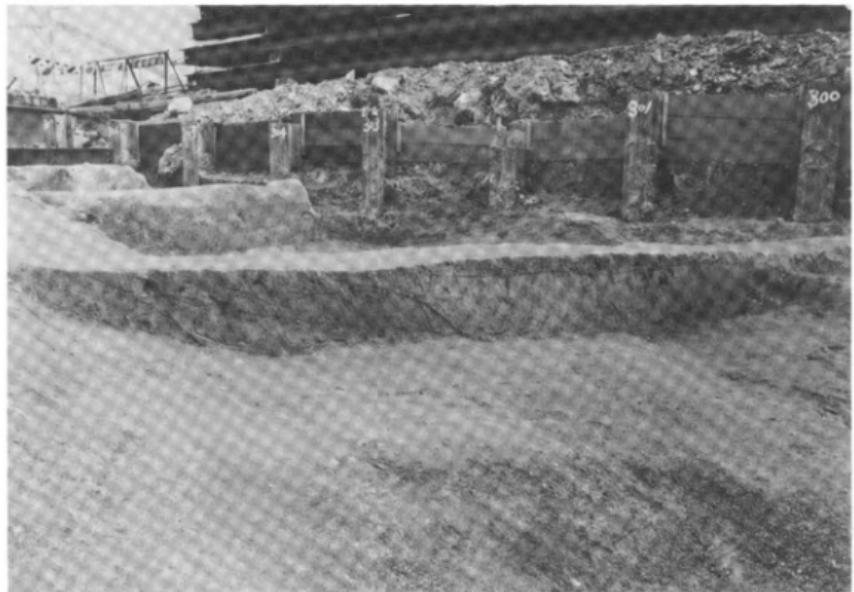
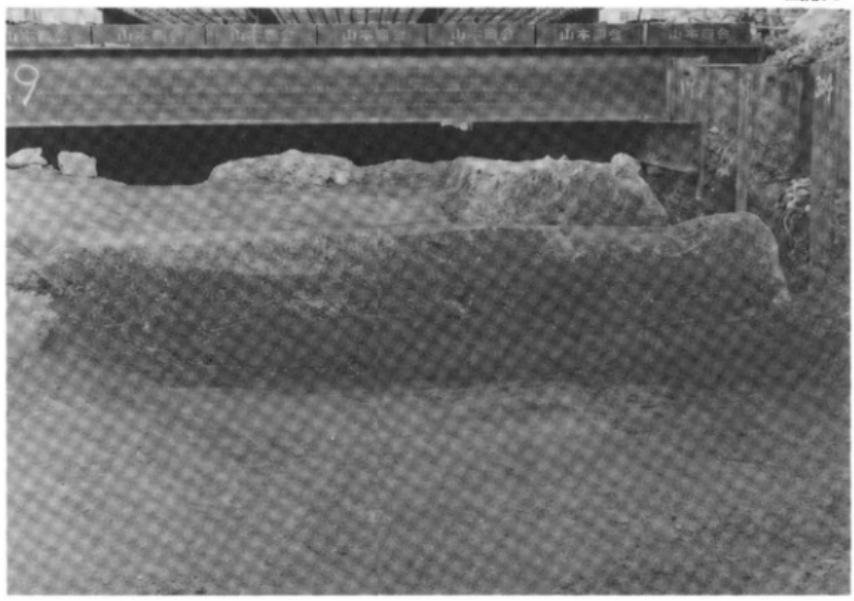




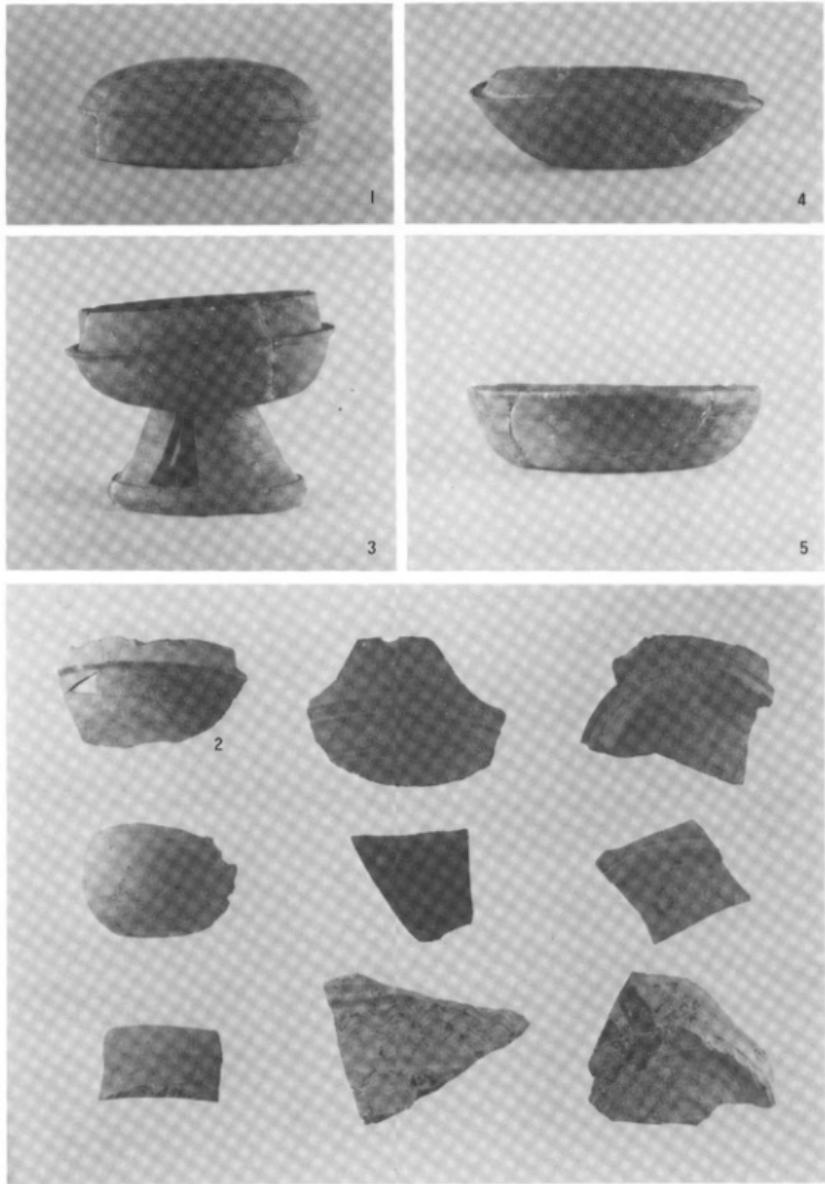
II区全景（東から）



S D 01 断面（南から）

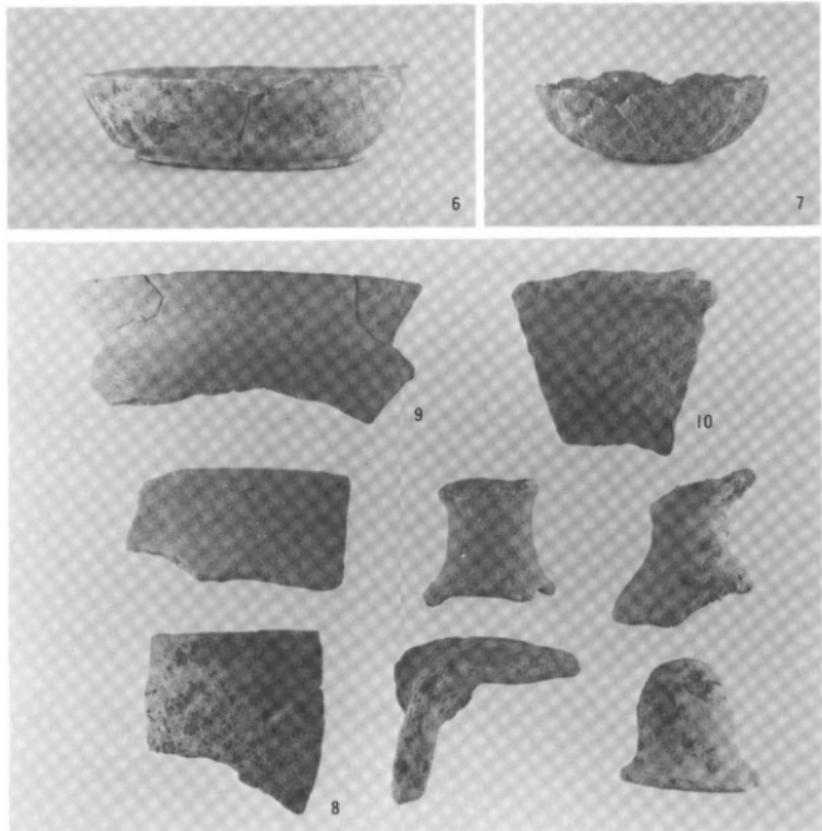


S D02 断面（西から）上：d-d'; 下：c-c'

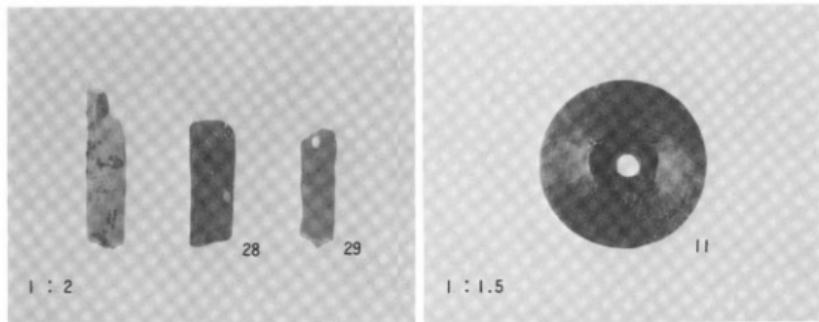


I 区包含層出土 須恵器

図版 5 遺物



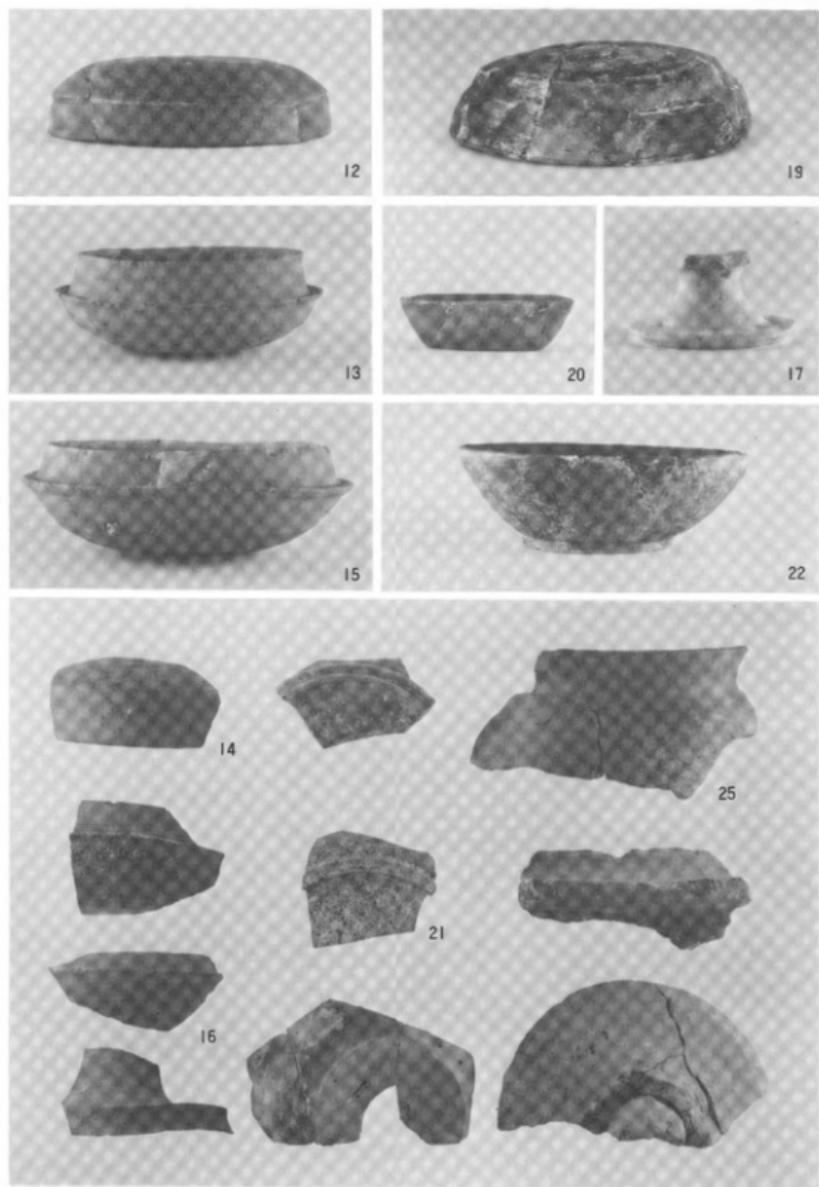
I 区包含層出土 土師器



包含層出土 土鍤

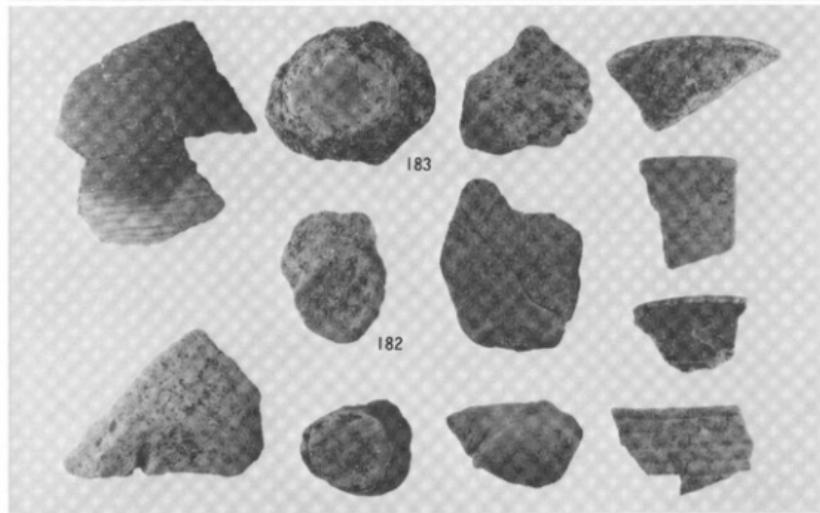
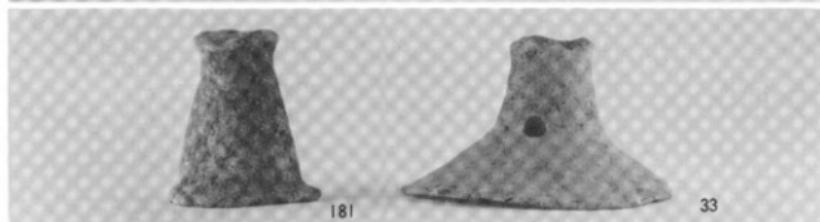
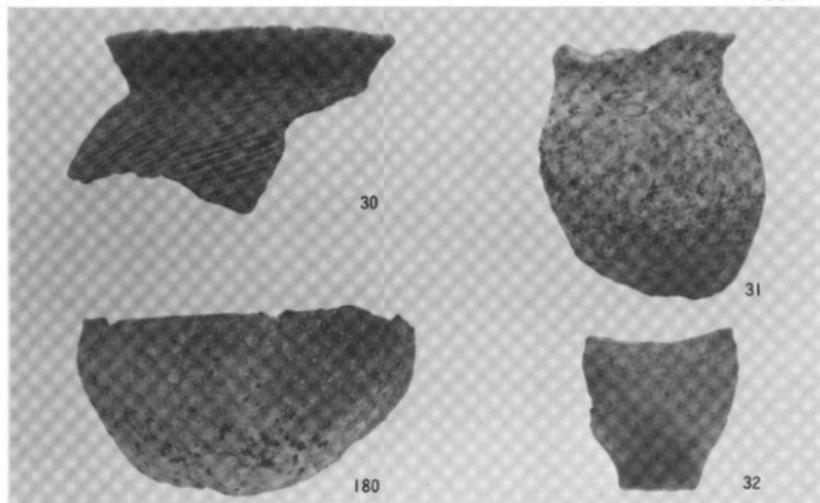
包含層出土 石製紡錘車

圖版 6  
遺  
物



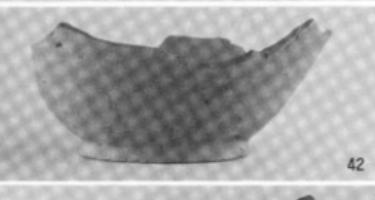
II区包含層出土土器 (12~21 須恵器, 22 黑色土器, 25 土師器)

図版 7  
遺物

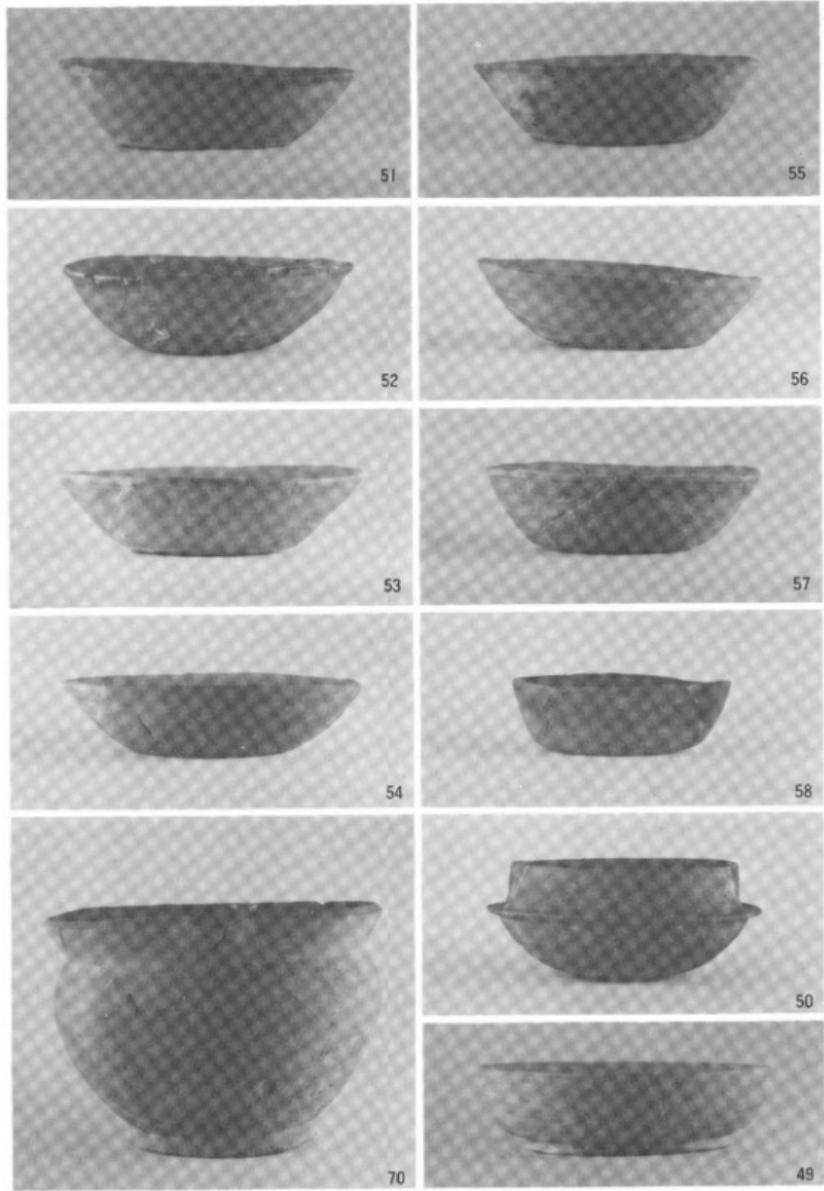


S D 01出土 弥生土器

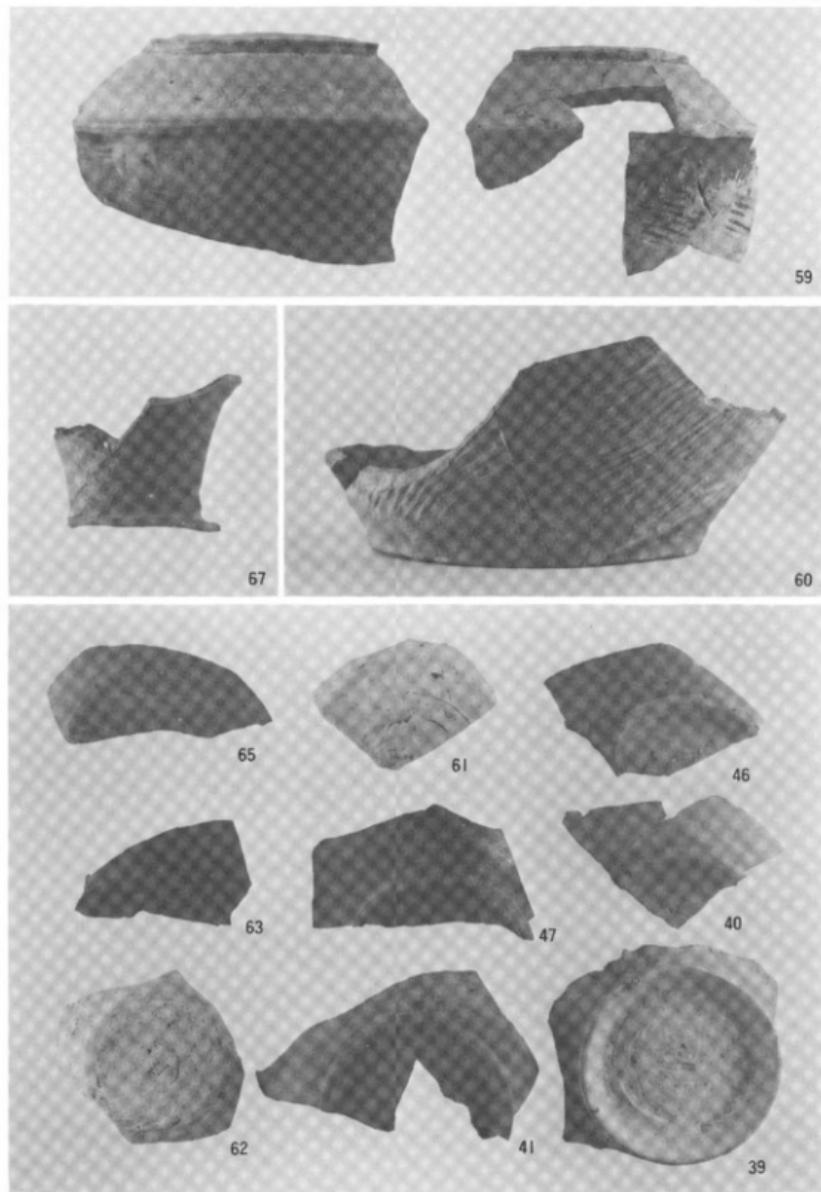
図版 8  
遺物



S D 02出土 須恵器

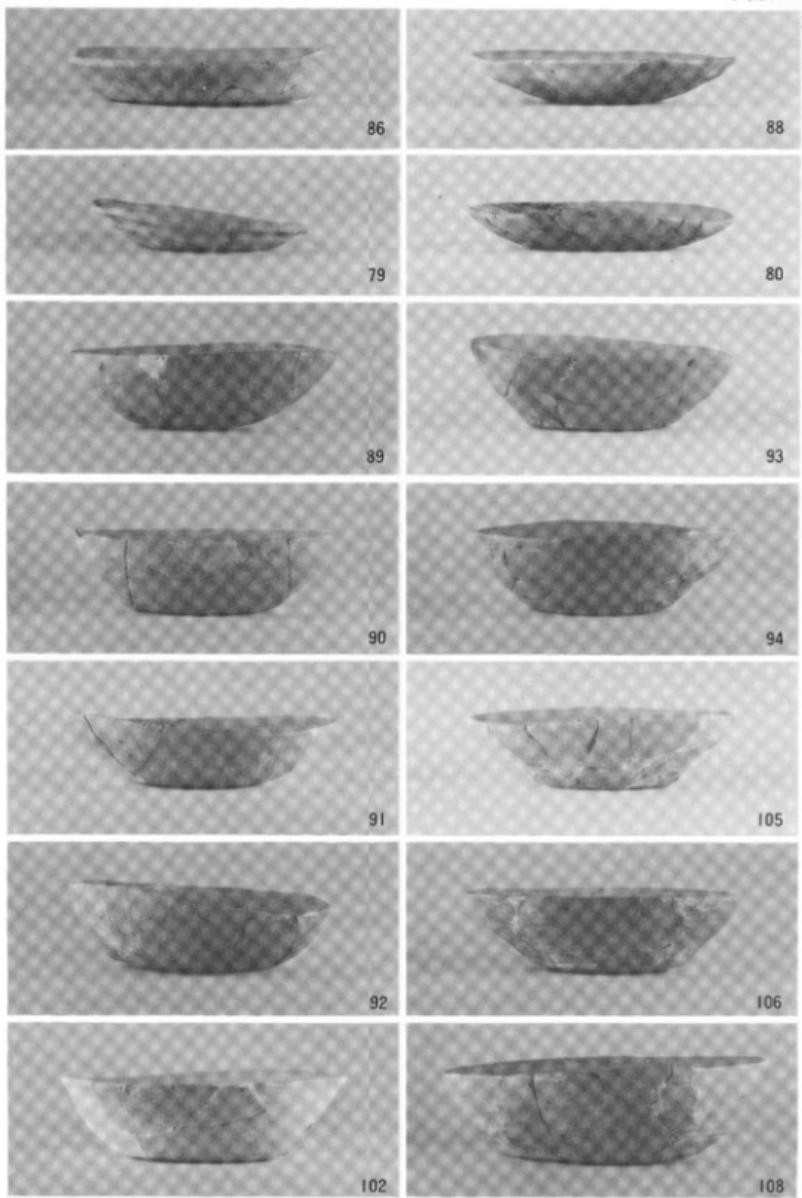


S D 02出土 須恵器



SD02出土 須恵器

図版II  
遺物



S D 02出土 土師器



113



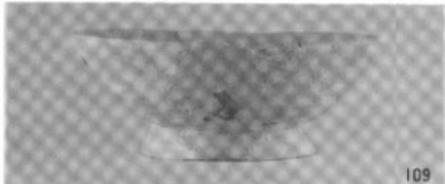
110



115



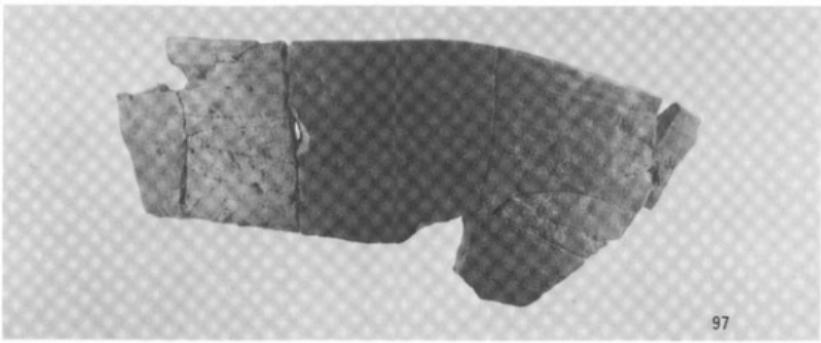
114



109



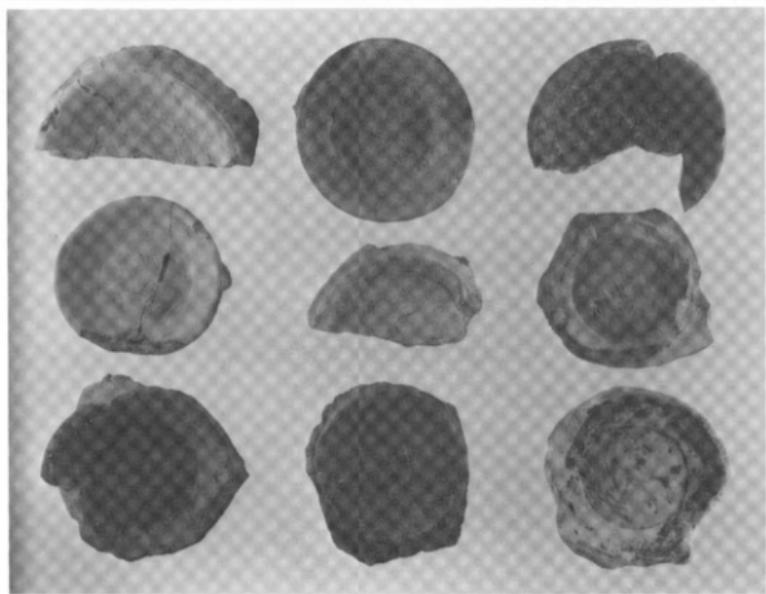
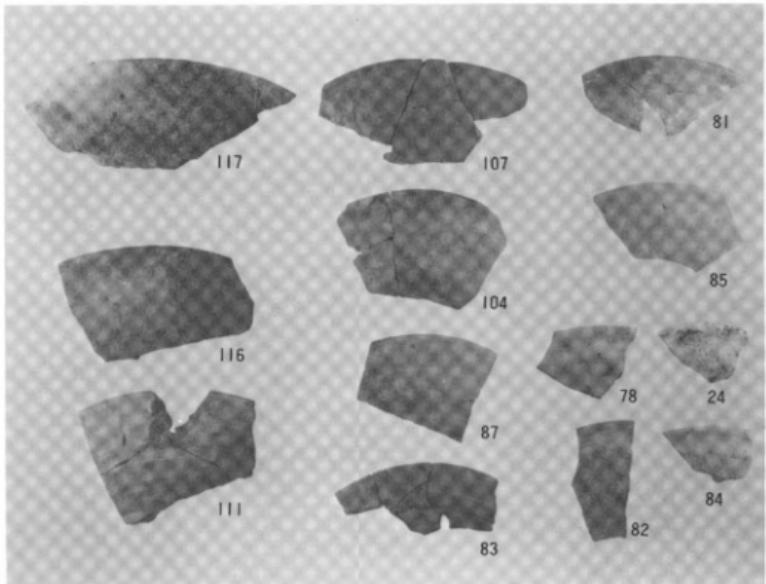
75



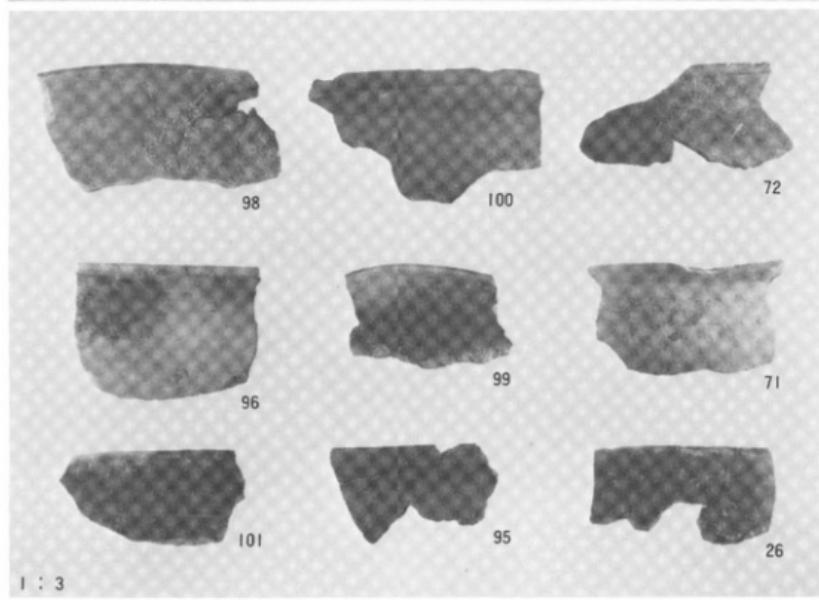
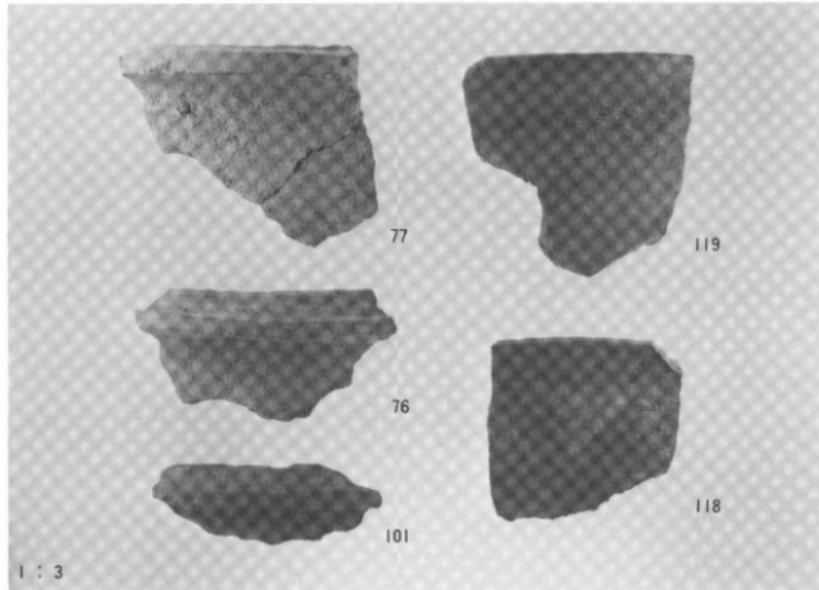
97

図版13

遺  
物

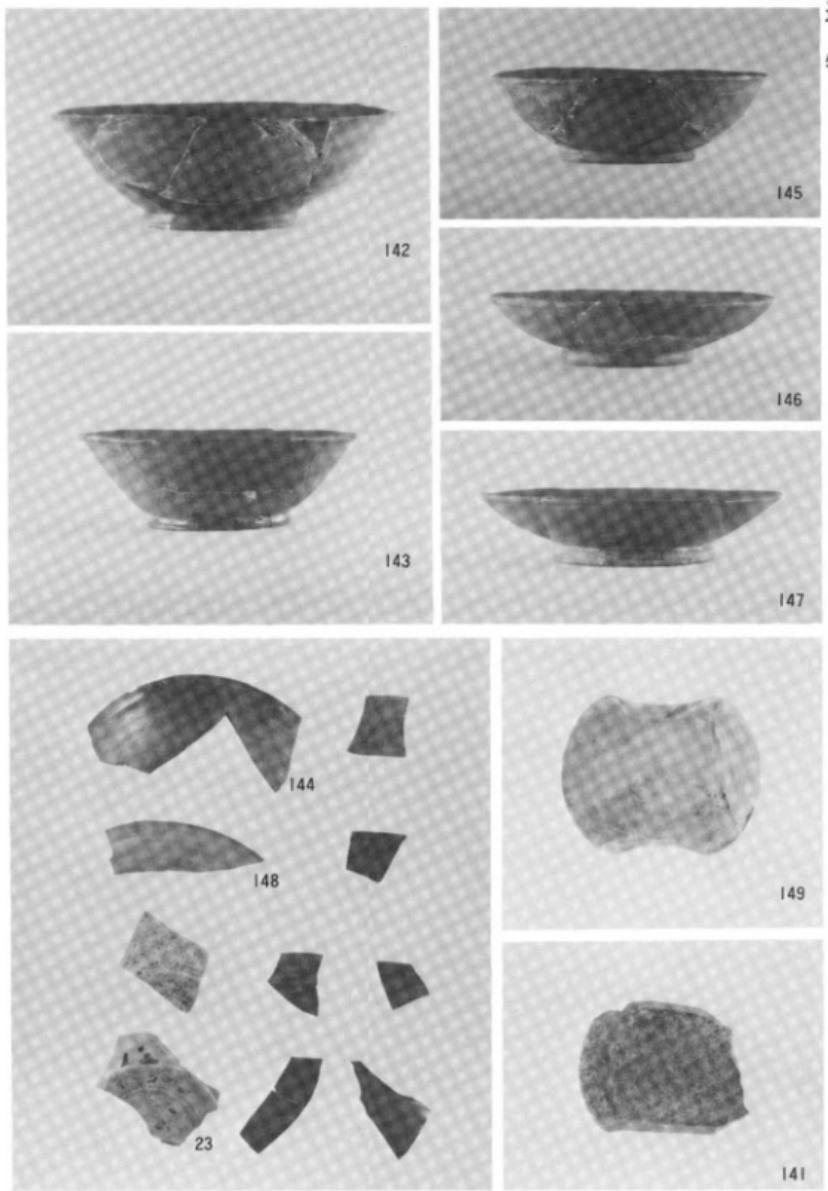


S D 02出土 土師器

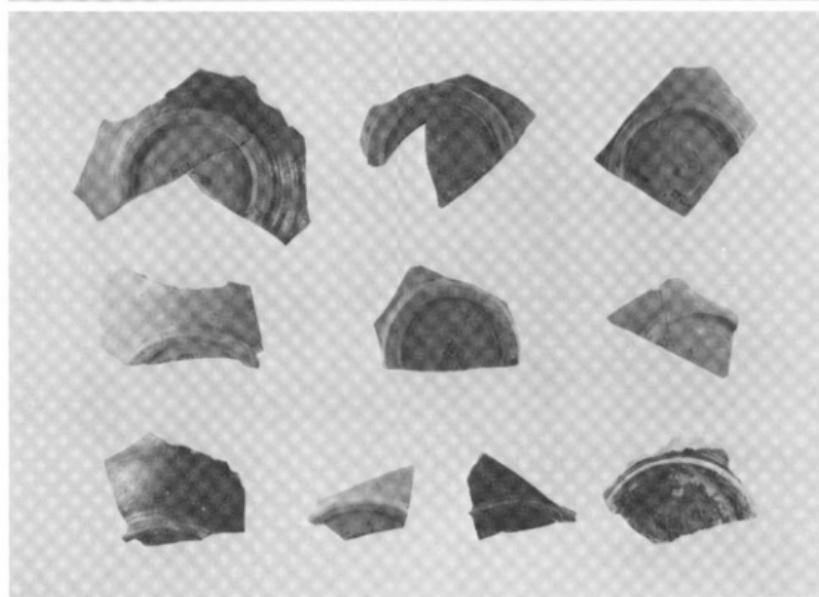
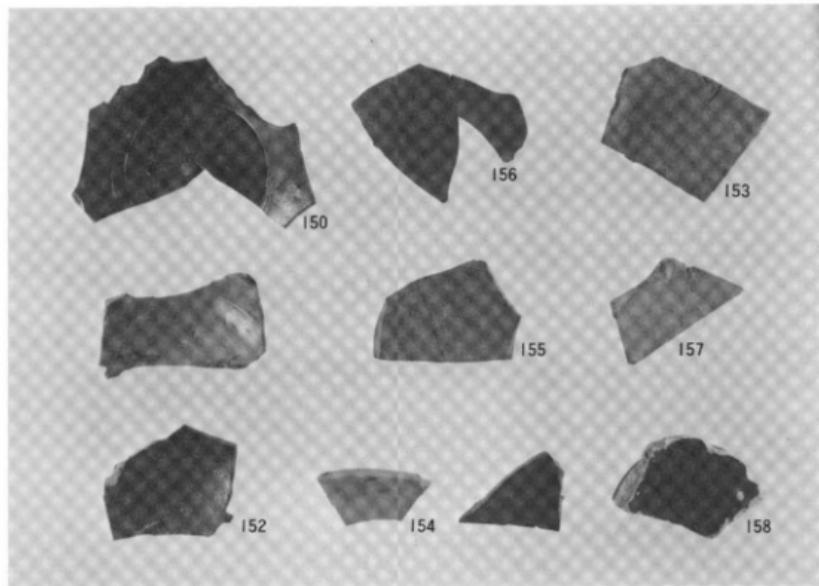


S D 02出土 土師器

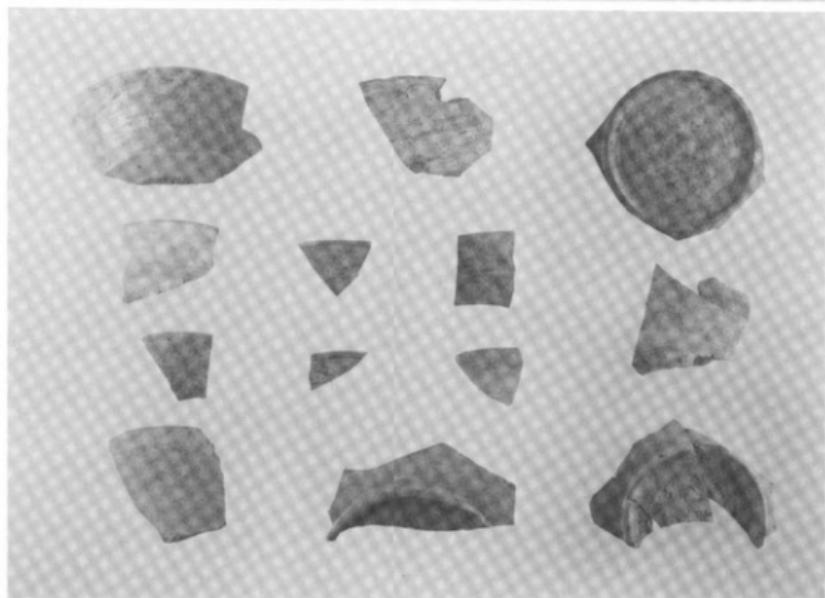
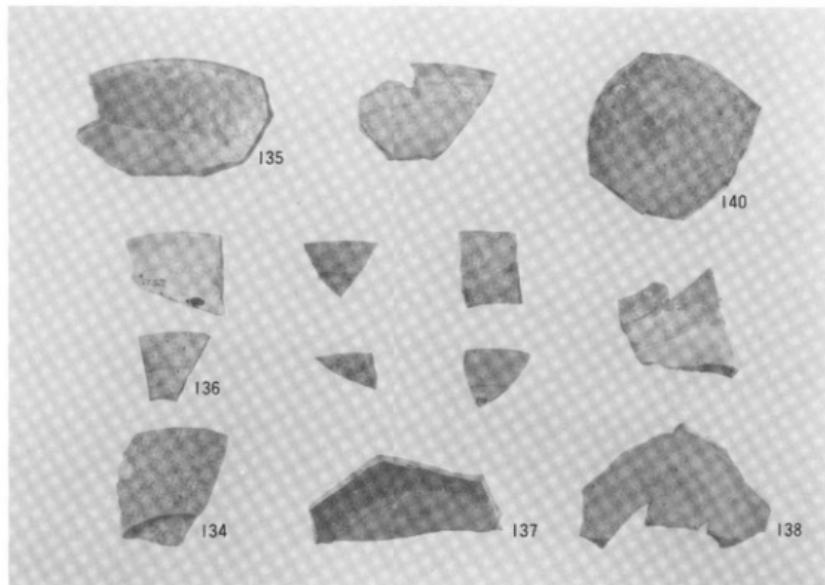
圖版15  
遺物



S D 02出土 緑釉陶器・灰釉陶器：141



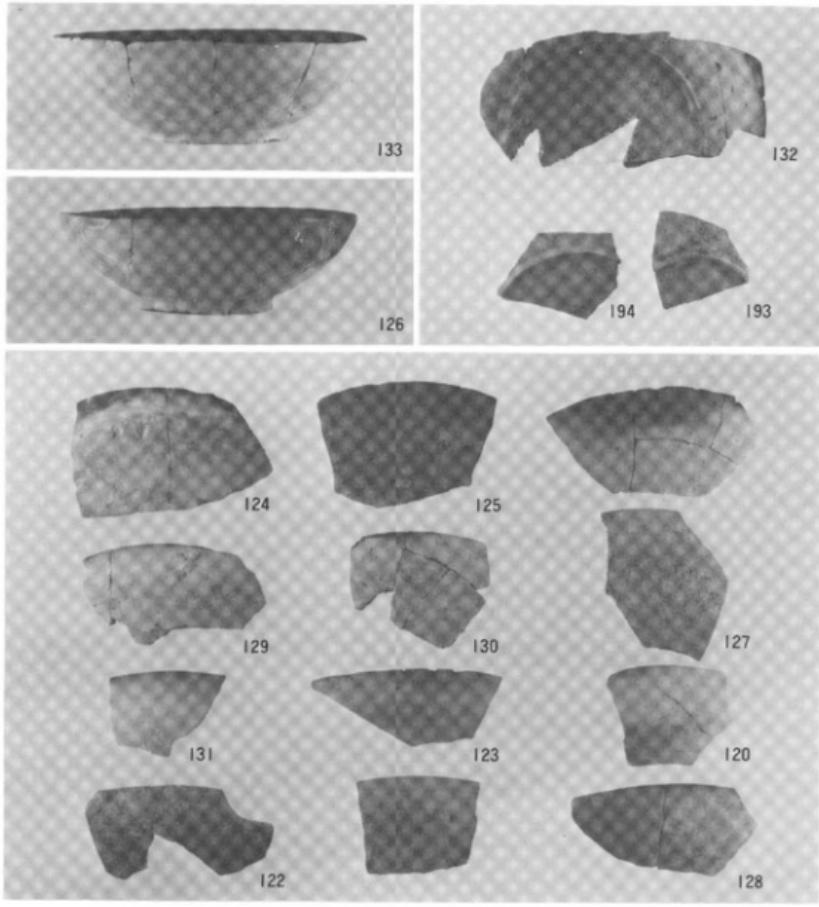
S D 02出土 緑釉陶器



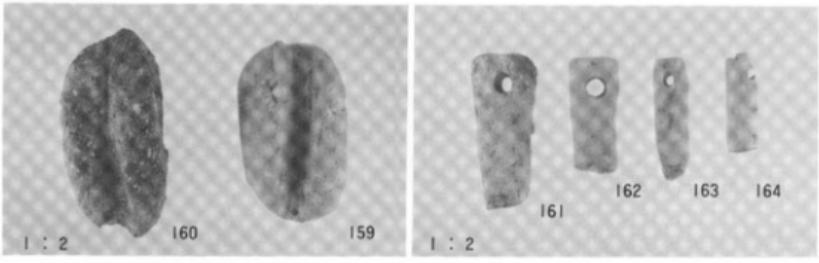
SD02出土 灰釉陶器

図版18

遺物



S D 02出土 黒色土器



S D 02出土 土錘